

# スレイマン大帝時代オスマン朝の大宰相と宰相たち (一)

鈴木 董

- 一、はじめに
- 二、史料について
- 三、大宰相及び宰相職就任者の確定 (以上本号)
- 四、大宰相及び宰相職就任者の経歴
- 五、キャリア・パターンの分析
- 六、おわりに

## 一 はじめに

### (一) オスマン朝の大宰相及び宰相職

オスマン朝の国制の大綱が真の確立を見たのは、西暦一六世紀中葉の第一〇代スレイマン大帝 (在位西暦一五二〇—一五六六) である。スレイマン大帝時代オスマン朝の大宰相と宰相たち (一)

一五六六年、回曆九二六—九七四年)の治世においてであった。この時代に、中央集権的な帝国体制が確立し、一方では地方において第九代セリム一世時代以降に獲得された広大な新領土をも含む帝国の版図全体をおおう地方行政制度としてのベイレルベイ Beylerbeyi 制度が確立するとともに、<sup>(1)</sup>他方では中央において集権的な支配組織が著しい発展を遂げた。

帝国中央の支配組織の真の中枢をなすものは、ヴェジール Vezir (宰相) 制度であった。<sup>(2)</sup>

イスラム世界に広く見られる政治制度であるヴェジール (宰相) 制度は、オスマン朝で受容された後、独自の発展を遂げていった。宰相制度は、少なくともオスマン朝第二代オルハン Orhan の時代以来存続し、<sup>(3)</sup>オスマン朝における中央集権的支配組織の発展の核となってきた制度であった。ここでは、組織の拡大につれてその権限が拡大していくとともに、初めただ一人であったヴェジールが、複数化し、スルタンについて全支配組織の頂点に立っただ一人のヴェジラザム Vezirazam (ヴェジリー・アーザム Vezir-i Azam) (大宰相) と、その補佐者としての複数のヴェジール Vezir (宰相) とに分かれていった。<sup>(4)</sup>

大宰相は、次第に「スルタンの絶対的代理人 (ヴェキリー・ムトラク Vekir-i Mutlak)<sup>(5)</sup>」となって、帝国の政治・外交・軍事のすべての最高責任者と化し、スルタンにかわって国政の最高の決定にかかわるデイヴァアヌ・ヒュマユーン Diyan-i Hümayun (御前會議) の事実上の主宰者となるとともに、<sup>(6)</sup>戦時にはしばしば、セルダール・エクレム Serdar-i Ekrem (最高司令官)<sup>(7)</sup>として、軍事上の総括責任者となった。

大宰相の補佐者としての宰相たちの数も次第に増大し、大宰相を第一宰相と見たうえで、宰相たちはその首位の者以下を順次、第二宰相 (ヴェジリー・サーニー Vezir-i Sani) など、<sup>(8)</sup>レイキンジ・ヴェジール İkinci Vezir) 第三宰相

(ヴェジリー・サーリス *Vezir-i Salis*、ウチュンジュ・ヴェジール *Üçüncü Vezir*)、第四宰相 (ヴェジリー・ラービー *Vezir-i Rabî*、ドルトゥンジュ・ヴェジール *Dörtüncü Vezir*)、第五宰相 (ヴェジリー・ハーニス *Vezir-i Hâmis*、ベシンジ・ヴェジール *Besinci Vezir*)、第六宰相 (ヴェジリー・サーデイス *Vezir-i Sâdis*、アルトゥンジュ・ヴェジール *Altıncı Vezir*) 等と呼ぶようになっていった。その数は、一六世紀初頭までは、通例二、三名であった<sup>(8)</sup>が、後に見るようにスレイマン大帝時代に五名に達し、初めて第六宰相さえ現われた。

これらの宰相たちは、御前会議の開かれるトプカプ宮殿の「大ドームの間 (クツベ・アルトゥ *Kubbe Altı*)」が成立してからは、これにちなんでクツベ・ヴェジリー *Kubbe Veziri* (大ドームの間の宰相) とも呼ばれるようになった<sup>(9)</sup>が、彼らはまた一六世紀中葉から、ダーヒル・ヴェジリー *Dahil Veziri* (内の宰相) とも呼ばれたと言われる。このダーヒル・ヴェジリーという呼称は、帝国中央のクツベ・ヴェジリーの他に、地方におけるバイレルベイ制の発展とともに重要なバイレルベイリク *Beylerbeylik* の有力なバイレルベイにもまた宰相の地位 (ヴェザーレット *Vezaret*) が与えられるようになり、これら地方在任の宰相の地位を有するバイレルベイたちをハリチュ・ヴェジリー *Harîç Veziri* (外の宰相) と呼んだ<sup>(10)</sup>のに対応する呼称であった。原則として御前会議に列することもなく帝国中央の宰相たちとは非常に性格を異にするこのハリチュ・ヴェジリーの数は、一六世紀末から一七世紀にかけて急速に増加し、その性格も非常に変化していったといわれる<sup>(11)</sup>。

この他にいま一つ、王子 (シエフザーデ *Şehzade*) たちが少年時代以降、地方にサンジャク・ベイ *Sancakbeyi* として出て、政治行政上の実地訓練を積むのが慣例となっていたオスマン朝においては<sup>(12)</sup>、この王子たちに近侍してララ *Lala* (傳育掛) としての役割を果たす者の一部もヴェジールと呼ばれたが、これも、帝国中央のクツベ・ヴェジリー

とは、その性格を異にするものであった。<sup>(13)</sup>

このように、オスマン朝には同じく宰相の称号を帯びる者にもいくつかの種類があったが、その中で帝国の支配組織の眞の頂点をなすのは、大宰相及び帝国中央のクツベ・ヴェジリーと呼ばれる宰相たちであった。帝国中央の大宰相及び宰相の権限等については、主として制度史的観点から詳細な研究が存在している。<sup>(14)</sup>従って、スレイマン大帝時代の宰相と宰相についても、モノグラフは存在しないものの、このような側面に関してはかなり詳しいことが知られている。しかし大宰相及び宰相職就任者に関しては、単なる伝記的研究を除けば意外に本格的な研究に乏しい。<sup>(15)</sup>そのことは、とりわけクツベ・ヴェジリーの場合に著しい。それゆえ、本稿では、制度としての大宰相・宰相職にはなく、スレイマン大帝時代における大宰相及び宰相職への就任者に焦点を絞り、大宰相及び宰相職就任者の確定を試み、その後これら就任者たちの出自と経歴を検討することを通じて、スレイマン大帝時代のオスマン帝国の政治社会史的特質の一端を明かしたい。

## (二) 研究史

オスマン朝の大宰相及び宰相のうち大宰相については、次節でみるように古くから大宰相列伝も編纂されており、近代に入ってから大宰相の簡略な列伝が著され、<sup>(16)</sup>個々の大宰相についてもかなりの数にのぼるモノグラフが存在している。<sup>(17)</sup>しかし、クツベ・ヴェジリーも含めた大宰相及び宰相職就任者の全体に関しては、オスマン朝時代に書かれたまとまった列伝も、近代の研究も殆んど存在していない。そのことは、そのままスレイマン大帝の時代にもあてまる。

こうした中で、スレイマン大帝時代を含むオスマン朝の全時期を通ずる大宰相及び宰相職就任者のほぼ唯一の詳細な一覧表は、オスマン朝末期の伝記研究家メフメット・スレーヤ Mehmed Sireyya の『シジツリ・オスマーニー Sicili-i Osmanî (オスマン摺紳録)<sup>18)</sup>』第四巻巻末の大宰相・宰相表(以下スレーヤ『宰相表』と略す)である。スレーヤの『シジツリ・オスマーニー』は、原初より一九世紀末葉に至るまでのオスマン朝のほぼ全時代にまたがる各領域の著名人士の総合的人名事典といふべき他に類例を見ない著作であり、現代トルコの歴史家にとつても、オスマン史上の人物の経歴を問題とするときには、まず第一に参照する基本文献となつてゐる。この『シジツリ・オスマーニー』の最終巻である第四巻巻末には、各種重要官職就任者の表が附されているが、その一部として、オスマン朝の全時期にわたる大宰相・宰相の変遷表が含まれてゐる。<sup>19)</sup>ここでは、スレイマン大帝の治世についても二頁にわたつて大宰相・宰相の変遷がたどられてゐる。<sup>20)</sup>このスレーヤの宰相表は、スレイマン大帝時代の大宰相及び宰相職就任者について、唯一のまとまつた近代人の手になる研究といふものであるが、性質上典拠は全く示されておらず、しかも、人名事典の本文の各項目の内容との矛盾も散見され、全体として多くの疑問点を含んでゐる。それゆゑ、スレイマン大帝時代の大宰相及び宰相職就任者に関し、政治社会的観点からの分析を試みようとする際にも、既存の文献にのみ依拠することなく、諸史料にもとづき大宰相及び宰相職就任者自体の確定を試みる必要必須の基礎作業となる。

本稿では、まず各種原史料に依つてスレイマン大帝時代の大宰相及び宰相職就任者を確定したうえで、彼らの経歴の分析を通じて、一六世紀中葉におけるオスマン帝国の権力構造の特質の一端を明かしたい。

1 スレイマン大帝時代におけるベイレルベイ制度の発展と、ベイレルベイたちの性格に関しては、稿を改めて論ずる予定であ

スレイマン大帝時代オスマン朝の大宰相と宰相たち(一)

なか、とりおさきナンイノルルベ入制度とヤの発展について、その文獻を参照せよ。 V. L. Ménage, “Beglertbegi”, EF, 1, 1159-1160, Halil Inalcık, “Eyaler”, EF, II, 721-724.

2 Halil Inalcık The Ottoman Empire, the Classical Age 1300-1600, London, 1973, 94-95.

3 Aydın Tameri, Osmanlı İmparatorluğu'nun Kuruluş Döneminde Vezir-i A'zamlık, Ankara, 1974, 33.

4 İsmail Hakkı Uzunçarşılı, Osmanlı Devletinin Merkez ve Bahriye Teşkilâtı, Ankara, 1948, (2) Uzunçarşılı, Merkez Teşkilâtı (1861-1866), 186.

5 Uzunçarşılı, Merkez Teşkilâtı, 112-113.

6 Uzunçarşılı, Merkez Teşkilâtı, 2.

7 Uzunçarşılı, Merkez Teşkilâtı, 158.

8 Uzunçarşılı, Merkez Teşkilâtı, 186-188.

9 Uzunçarşılı, Merkez Teşkilâtı, 186.

10 Uzunçarşılı, Merkez Teşkilâtı, 195.

11 Uzunçarşılı, Merkez Teşkilâtı, 196.

12 Uzunçarşılı, Osmanlı Devletinin Saray Teşkilâtı, Ankara, 1945, 117-121.

13 Petra Kappert, Die Osmanischen Prinzen and Ihre Residenz Amasya im 15. und 16. Jahrhundert, Leiden, 1976, 11.

14 藤本大次郎 Hamilton Gibb and Harold Bowen, Islamic Society and the West, Vol. I, Part 1, London, 1951, 107-115.

Albert Howe Lybyer, The Government of the Ottoman Empire in the Time of Suleiman the Magnificent, 1st. ed. Cambridge, Mass. 1913, Rep.ed, New York, 1966, 163-167.

ムネロトデニ冠距亞母紀ムノツ' Uzunçarşılı, Merkez Teşkilâtı, 111-213, その形成に、五世紀中葉からの發展の過程に

- らうだ' Aydın Taneri, *Osmanlı İmparatorluğu'nun Kuruluş Döneminde Vezirî A'zamlık*, Ankara, 1974.
- 15 原初から一五世紀中葉までの大宰相職就任者について、簡単ながらマネリが出自、経歴なども分析を加えている (Taneri, *Osmanlı İmparatorluğu'nun Kuruluş Döneminde Vezirî A'zamlık*)。また同時代の大宰相・宰相を輩出したチャンクメン Candarli 家についてのギンツェンノユルプ Ismail Hakki Uzunçarşılı, *Çandarlı Vezir Aylesi*, Ankara, 1974.
- 16 信頼度も高く重要なものとしては、次の二つの詳細なオスマン朝通史に含まれる大宰相の列伝の部分及び、ダニシヒュメンドの年表補巻のオスマン朝の高官列伝中の大宰相の部を挙げることができよう。
- Ismail Hakki Uzunçarşılı, *Osmanlı Tarihi*, 4 vols. in 6 Books, Ankara, 1947-1959. (以下 OT' と略す)
- Mustafa Cezar, *Midhat Sertöğlü ve Heyeti, Resimli-Haritalı Mufassal Osmanlı Tarihi*, 6 vols., İstanbul, -1972. (以下 MOT と略す)
- Ismail Hâmi Danişmend, *Osmanlı Devlet Erkânı, İzahlı Osmanlı Tarihi Kronolojisi*, V, İstanbul, 1971. 7-108. (以下 Kronoloji と略す)
- 17 いくつかの個別研究論文に加え欧文版及びトルコ語版イسلام百科事典の項目論文として、多数の大宰相の小伝が存在する。  
*Encyclopaedia of Islam*, Vol. I-, 2nd. ed., Leiden, 1960-. (以下 E'Ir と略す)
- İslâm Ansiklopedisi*, Vol. I-, İstanbul, 1941-. (以下 İA と略す)
- 18 Mehmed Süreyya, *Sicill-i Osmanî*, 4 vols., 1st. ed., İstanbul, 1308-1315, Rep. ed., Westmead, 1971. (以下 SO と略す)
- 19 SO, IV, 738-762.
- 20 SO, IV, 742-743.

## 二 史料について

### (一) はじめに

スレイマン大帝時代史については、夥しい古文書及び記述史料が存在している<sup>(1)</sup>。それらの中で、スレイマン大帝の一代のみを対象とする「スレイマン・ナーメ(スレイマンの書)」と称される歴史書のみでも、莫大な数にのぼる。これらの史料の大部分は今なお未刊のままに残されており、それらを全面的に利用することは困難である。しかし、現存するスレイマン時代史の史料のごく一部をなすにすぎない公刊された諸史料ですら、かなりの量にのぼる。しかも、これら既刊の史料さえ十二分に利用されつくしたとは言い難い状況にある。本稿では、利用する史料を既に刊本となった年代記・史書・伝記集成等に限定し、その範囲内において諸史料に徹底的な検討を加えることを通じて、スレイマン大帝時代史に関する基本的問題の一端を可能な限り解明することに努力することとしたい。以下、本稿において利用した主要史料及び若干の基本文献について簡単に説明を加えておく。

### (二) 年代記・歴史書

1' Mustafa, Celalzade (Koca Nişancı), *Tabakat ül-Memalik ve Derecet ül-Mesalik*.

刊本 Celalzade Mustafa, *Geschichte Süleymân Kânûnis von 1520 bis 1557 oder Tabakât ül-Memalik ve*



Derecât ül-Mesâlik, ed. by Petra Kappert, Wiesbaden, 1981.

(以上 Celalzade と略記す。)

本書著者は、スレイマン大帝時代長年にわたって大宰相を勤めたイブラヒム・パシャの補佐者として活躍し、後に書記官長(レイス・ウル・キュッターブ Reis-ül-Küttâb)、国璽尚書(ニシヤンジュ Nisancı)といった要職を歴任し、スレイマン大帝時代の政治と行政の中枢に自らも加わっていたジェラルル・ザーデ・ムスタファ Celalzade Mustafa(西暦一四九〇頃—一五六七年)である。本書は、序文の中で述べられている構想に従えば、全体が三〇のタバカ(層)に分かたれ、そのうち二九のタバカではスレイマン大帝時代のオスマン朝の地理と制度が詳述され、最後の第三〇番目のタバカが、スレイマン大帝時代史にあてられるはずであった。

地理と制度を論じた二九のタバカは、一説では、一卷の書としてまとめられたともいうが現存せず、スレイマン大帝時代史である第三〇番目のタバカのみが今日に伝えられている。その記述は、オスマン朝第九代セリム一世(死(回曆九二六年))に始まり、スレイマニエ・モスクの落成した回曆九六四年に及んでいる。ペトラ・カッペルト博士が校訂刊行したベルリン写本のファクシミル版で全五二八葉(一〇五六頁)に及ぶこの大著は、スレイマン大帝時代史に関する諸々の記述史料の中で、最も詳細かつ内容に富む基本史料である。後代の史家の多くもスレイマン時代史に関して本書によることが多い。本稿においても、本書を第一の基本史料として用いた。

但し、純粋な編年史の体裁をとらずスレイマン大帝時代の主要な戦役の記述を柱とするため、顕著な事件のない時期についての記述を全く欠く。これに加えて、文章が技巧的にすぎて、千頁を越える大著のわりには、情報量に乏しいうらみがあることもいえない。

スレイマン大帝時代オスマン朝の大宰相と宰相たち(一)

2 Lütfi Paşa, *Tevarih-i Al-i Osman*, İstanbul, 1341.

(以下、Lütfiと略記する。)

スレイマン大帝の治世の中頃に短期間ながら大宰相を勤めた政治家ルトフィー・パシャ(西暦一五六四年 回曆九七一年没)の手になると伝えられるオスマン朝通史。叙述はオスマン朝の原初に始まり、スレイマン大帝時代の回曆九六一年に及ぶ。スレイマン大帝時代についての部分は全四二六頁中一五四頁を占めているが、ジェラル・ザーデに比すれば、量的にも遙かに少なく、記述も簡単である。特色としては戦鬪の記述に精彩がある。官職の補任等については甚だ簡単で、本稿の目的にとっては、同時代人の手になるにもかかわらず、利用価値はさほど大きくない。文  
体は平明である。

3 Rüstem Paşa, *Tarih-i Al-i Osman*,

部分独訳 Rüstem Pascha, *Die Osmanische Chronik des Rüstem Pascha*, tr. by Ludwig Forrer, Leipzig, 1923.

(以下 Rüstem と略記する。)

スレイマン大帝時代の後期に長年にわたり大宰相を勤めたルステム・パシャの手になるとも伝えられるオスマン朝通史であるが、当時から好學をもって知られ他にもいくつもの著書があり、本文中にも著者本人についての言及のあるルトフィー・パシャの史書とことなり、文學を解さなかつたことでも知られるルステム・パシャ自身の手になるものである可能性は少ない。記述はオスマン朝の原初からスレイマン大帝時代の回曆九六八年に及ぶが、未刊である。ただオスマン朝第八代バヤズィット二世から第一〇代スレイマン大帝時代までの部分がフォーラーによる独訳の形で

刊行された。全体の量のわりには官職の補任についての記事が多く、他に見られぬ情報を含んでいるため、この面では意外に利用価値がある。ただ記述のあり方にやや雑なところがあり注意を要する。

4 Ramazan-zade Küçük Nisancı Mehmed Çebeî(Pasa) Tarih-i Nisancı, İstanbul, 1279 H.

(以下 Ramazan-zade と略記する。)

スレイマン大帝の末年に書記官長から、ごく短期間、数度にわたり国璽尚書を勤めた官人ラマザン・ザーデ・メフメット・(ハ)シヤ) (西暦一五七一年、回曆九七九年没) の手になる簡潔な世界史、写本の形でも流布本が非常に多く、刊本も数次にわたり刊行されている。スレイマン大帝時代についても、本の系統によりちがうが、刊本の場合には回曆九六九年までの部分を含んでいる。ジェラルル・ザーデを大ニシヤンジユ(コジヤ・ニシヤンジユ Koca Nisancı) と通称するのに対し小ニシヤンジユ(キユチュク・ニシヤンジユ Küçük Nisancı) の呼称をもって知られる同時代人の手になる著作であるが、簡潔にすぎて情報に乏しい。本稿の目的に関しては、年代記の本文より、むしろ同書に含まれる簡略な大宰相・宰相の表の部分が欠落や誤りは多いが<sup>(3)</sup>ある程度参考になる。

5 Mustafa Selaniki, Tarih-i Selaniki, İstanbul, 1281 H.,

(以下 Selaniki と略記する。)

一六世紀後半の官人ムスタファ・セラニキ(西暦一五九九年頃、回曆一〇〇八年頃没)の手になる年代記。叙述はスレイマン大帝晩年の回曆九七一年から第一三代メフメット三世時代の回曆一〇〇八年にまで及ぶが、回曆一〇〇一年までの部分のみが刊行されている。戦役の記述中心の物語的史書よりむしろ本格的な編年史的傾向のつよい本書も、本稿の目的にとっては、スレイマン大帝末年について若干の利用価値を有するにとどまる。

6 Ibrahim Pecevi, *Tarih-i Pecevi*, 2 vols., Istanbul, 1281-1283 H., Rep.ed., Istanbul, 1980.

(以下 Pecevi と略記する。)

著書イブラヒム・ペチェヴィー(西暦一五七四—一六七〇年?、回曆九八二—一〇六一一年?)は、一七世紀前半の官人で、その母方の系譜から、スレイマン大帝晩年の大宰相ソコルル・メフメット・パシヤの遠縁にあたる。本書は、スレイマン大帝の即位から、オスマン朝一七代ムラト四世の治世の終りにあたる回曆一〇四九年までの一二三年間を扱う年代記である。スレイマン大帝時代の部分は、ゲリボルル・ムスタファ・アリ Geliholulu Mustafa Ali の世界史 *Kunh ul-Ahbar* のうち、未だ未刊のままとなっているスレイマン大帝時代の部分に依拠するところが多く、これをジェラール・ザード等によって補なっているものと思われる。官職補任等について比較的詳しく、ジェラール・ザードや、ルトフィー・パシヤなどに見られぬ情報をかなり含んでいる。

またペチェヴィーには、おそらくはムスタファ・アリにならって、各スルタンの時代ごとにその時代に在任した大宰相・宰相の列伝が附されており、本稿の目的にとつては、この部分が有益である。とりわけ、その出自、初期の経歴について貴重な情報を含む。

7 *Karagelebizade Abdilaziz, Ravzat ul-Ebrar*, Bulak, 1248 H.

(以下 Ravzat と略記する。)

一七世紀前半に活躍した名門ウレマーの家系出身の著名なイスラム神学法学者で要職についたことのあるカラチェレビィ・ザード・アブドウル・アジズ・エフェンディ(西暦一五九一—一六五八年、回曆一〇〇〇—一〇六八年)の手になる世界史である。冒頭からオスマン朝史の部分のうち回曆一〇五六年に至る部分のみが刊行され、その余の著

者の同時代を扱う部分は未刊である。スレイマン大帝時代の部分について言えば、後代の編纂にかかり、独自の史料価値に乏しいが、一六世紀の物語的・軍記的色彩の強い歴史書に比して、形の整った編年史の形をとっており、スレイマン大帝時代についても若干の有益な情報を含んでいる。

8 Karacelebizade Abdülaziz, Süleymanname, Bulak, 1248 H.

(以下 Süleymanname と略記する。)

7の著者の手になるスレイマン大帝の一代記であり、分量は7のスレイマン大帝の部分より多いが、文学上の技巧を駆使して美文を綴ることに主眼があり、内容的には独自の価値に乏しい。

9 Mehmed Edirnevi, Nuhbet ü'l-Tevarih, İstanbul, 1276 H.

(以下 Nuhbet と略記する。)

一七世紀前半のウレマー、メフメット・エディルネヴィー(西暦一六四〇年、回曆一〇五〇年没)の手になる預言者ムハンマドからオスマン朝第一四代アフメット一世の時代までのイスラム通史。独自の史料価値には乏しいが、かなり徹底して編年史の体裁をとっており官職補任の年月日などについて、若干の他に見られない情報を含む。

10 Solakzade Mehmed, Tarih-i Solakzade, İstanbul, 1297 H.

(以下 Solakzade と略記する。)

一七世紀前半の官人ソラク・ザーデ・メフメット(西暦一六五七年、回曆一〇六八年没)の手になるオスマン朝通史。スレイマン大帝の全時代を含む。独自の情報に乏しいが、しばしば自らの記述の典拠を明記し、また異説を紹介するところに特色があり、若干の利用価値を有している。

スレイマン大帝時代オスマン朝の大宰相と宰相たち(一)

11 Münecimbaşî Ahmed Dede, Camî al-Duyal,

一七世紀後半のメヴレヴィー教団員で、ムネツジム・ハシユ Münecimbaşî (欽天監) を勤めたアフメット・デデ (西曆一七〇二年、回曆一一一三年没) の手になる回曆一〇八三年に至る世界史である。原本はアラビア語で書かれ未刊であるが、古くは一八世紀初頭に、詩人ネーディム Nedim により Sahîf ü-Ahbar の名をもってトルコ語に訳され、以後、主としてこのネーディムの土訳本がトルコの歴史家によって用いられ引用されてきた。

11-a Sahîf ü-Ahbar, tr. by. Nedim, 3 vols, İstanbul, 1285 H.

(以下、Münecimbaşî-A と略記する。)

しかし、近年に入り現代トルコの史家イスマイル・エリユンサルにより、アラビア語原典からの現代トルコ語訳が部分的に刊行された。

11-b Münecimbaşî Tarihi, tr. by. İsmail Erünsal, 2 vols., n. p. n. d.,

(以下、Münecimbaşî-B と略記する。)

ムネツジム・ハシユの著書は、後代の編纂物ではあるが、各種の史料を比較対照しつつ叙述を進めている部分もみられ、同時代史料に対する補足史料として、ある程度独自の価値をもつ。

本稿では、古くから用いられているネーディム訳のオスマン語版と、原文に忠実であることを旨としたという現代トルコ語の新訳を併用した。

12 Hoca Sadeddin, Tac ü-Tevarih, 2 vols, İstanbul, 1280 H.

一六世紀末に活躍したイスラム神学法学者サーデッティンの手になるオスマン朝通史。後代の編纂物であり、記述

は初代オスマンからセリム一世の時代までしか及ばずスレイマン大帝時代は含まれていないが、セリム一世時代については他に刊本史料が乏しく、かなりの有用性をもつ。本稿では主として、スレイマン大帝時代の宰相たちの初期の経歴の検討の一材料として用いる。

③ 伝記集成——(一) 詩人列伝<sup>6)</sup>

1 *Sehi, Hest Bihîst*, ed. by Günay Kut, Cambridge, Mass, 1978.

(以下 *Sehi* と略記する。)

一六世紀前半の官人セヒー(西曆一五四八年、回曆九五五年没)の手になるオスマン朝で最初の詩人列伝(シユアラ・テズケレスィ *Suara Tezkeresi*)である。オスマン朝の宰相には政治家であると同時に詩人である人物も散見され、それらの人物についての詩人列伝の項目には、特にその出自や経歴の大枠について時に他の史書にみられぬ記述を含んでいる。また、詩人たちの列伝中に、それら詩人たちとかかわりをもった宰相たちの記事もみられる。こうした点で、セヒーのみならず以下に紹介するいくつかの詩人列伝も史料として利用した。なお、セヒーの詩人列伝には、イスタンブル版刊本もあり従来はこれを用いられてきたが、諸写本及び刊本との比較校訂をへた、スレイマニエ図書館に現在属するアヤソフィア図書館本の写本のファクシミリ版の新しい刊本を本稿では利用した。

2 *Latifi, Tezkere-i Latifi, Istanbul, 1314.*

(以下 *Latifi* と略記する。)

一六世紀の実務家ラティーフィー(西曆一五八二年、回曆九九〇年没)の手になる詩人列伝。回曆九五三年に執筆  
スレイマン大帝時代オスマン朝の大宰相と宰相たち(一)

を終えたと言われる。史料としての性格、利用価値は、ほぼ1に同じ。

3 *Aşık Çelebi, Mesâ'ir üş-Şîrâa*, ed. by G. M. Meredith-Owen, London, 1971.

(以下 *Aşık Çelebi* と略記する。)

スレイマン大帝時代のイスラム神学学者アーシユク・チェレビイ(西暦一五二〇—一五七二年、回曆九二六—九七九年)の手になるオスマン朝の原初より彼の時代までのオスマン朝の詩人の列伝。他の詩人列伝に比して、各人の経歴と逸話についての記述が多いところに特色があり、本稿の目的にとっても、他の詩人列伝に比して豊かな情報を含んでいる。

他写本との校訂をへた大英図書館本写本のファクシミリ版が刊行されており、これを利用した。

4 *Kınalzade Hasan Çelebi, Tezkiret üş-Şîrâa*, ed. by İbrahim Kutluk, 2 vols., Ankara, 1978-81.

(以下 *Kınalzade* と略記する。)

一六世紀後半のイスラム神学学者クナル・ザーデ・ハサン・チェレビイ(西暦一五四六—一六〇四年、回曆九五三—一〇二二年)の手になる詩人列伝。

(四) 伝記集成——(一) 官人・学者列伝等

1 *Nevizade Atâ'i, Hada'ik üi-Hakaik fi Tekmiliet eş-Sakaik*, 2 vols., Istanbul, 1268 H.,

(以下 *Atâ'i* と略記する。)

タシユキョフ・ザーデ・マフメット *Taşköprüzade Ahmed* の手になるオスマン朝の原初からスレイマン大帝時代



までの学者・スーフィー教団指導者の列伝である *Sakaik ün-Nu'maniye* の続編のうち、一七世紀前半のイスラム神学学者ネヴィ・ザーデ・アターイー（西暦一五八三—一六三四年、回曆九九一—一〇四四年）の手になるもの。

スレイマン大帝時代からムラト四世時代までを含むが、各スルタンの時代について、大宰相、宰相を始めとする重要官職就任者の任免に関する略表が附されている。<sup>(?)</sup> 本稿の目的にとっては、主としてこの部分が検討の対象となるが、少なくともスレイマン大帝時代の部分についていえば、その大宰相、宰相表は極めて不完全でかつ誤りを含んでいる。

2 Osmanzade Taib Ahmed, *Hadikat üi-Vizera*, 1st. ed. Istanbul, 1276 H., Rep. ed., Freiburg, 1969.

(以下 Osmanzade と略記する。)

一八世紀初頭のイスラム神学学者オスマン・ザーデ・ターイブ・アフメット（西暦一七二四年、回曆一一三六年没）の手になるオスマン朝の大宰相の列伝である。原初から一八世紀初頭のラミー・メフメット・パシャ Ramî Mehmed Paşa に至るまでの九三名の大宰相の小伝を含んでいる。内容的には、典拠も示されておらず、必ずしも信頼し得る史料とは言えないが、従来、諸学者は、広く本書を利用してゐる。本稿においては、主として大宰相及び宰相就任者の出自、経歴を検討する際に、補足的史料として利用することとする。

3 Tayyazade Ata, *Tarih-i Ata*, 5 vols., Istanbul, 1291-1293 H.

(以下 Ata と略記する。)

宮廷出身者の子で、一九世紀中葉のイスラム神学学者タヤール・ザーデ・アタ（西暦一八〇八—一八八二年、回曆一二二二—一二九九年）の手になるオスマン朝宮廷史。その第二巻に宮廷出身の大宰相たちの列伝が含まれている。

スレイマン大帝時代オスマン朝の大宰相と宰相たち (一)

はるか後代の編纂物であるために史料的价值は必ずしも高くないが、従来の諸学者によってかなり広く用いられてきており、比較検討の一材料として使用する。

(五) 文書集その他

1 Feridun, Ahmed, *Müncşat üs-Selatin*, 2 vols, 2 nd. ed., Istanbul, 1274-1275 H.

(以下 Feridun と略記する。)

スレイマン大帝時代の実務官人で、その後書記官長、国璽尚書を歴任し、とりわけ国璽尚書として名声の高かったフェリドゥン・アフメット(西暦一五八三年、回曆九九一年没)が編纂したといわれる公文書類の書式集成である。多種多様な初期から彼自身の時代までの文書の写しと称されるものが含まれるが、これら文書群には、偽作や後代の手の加わったものが多いといわれ、取り扱いには注意が必要である。本稿の目的にとっては、一般に「スレイマン大帝日録(スレイマン・ルズナーメスイ Sileyman Ruznamesi)」と呼ばれるものの抜粋の部分の利用価値が大きい。

2 "Sultan Kanuni Süleyman Han Çağına ait Tarih Kayıtları," ed. by M. Kemal Özergin, Atatürk Üniversitesi Edebiyat Fakültesi Araştırma Dergisi, No. 3, (1972), 61-130, 20 plates, *Universitesi Edebiyat Fakültesi Araştırma Dergisi*, No. 3, (1972), 61-130, 20 plates,

(以下 "Tarih Kayıtları" と略す。邦語では『年号日附記録集』と略記する。)

回曆九四五年から回曆九八八年までの間の重要事件についての短い年号日附を中心とする記述からなる。この著作の主要部分は、編者エゼルギンの説くところによれば、回曆九七五年(西暦一五六八年)頃に成立し、その後末尾の部分が書き加えられたのであろうという。成立の事情が明かでなく、内容的にも時に若干の疑問を伴うが、官職の

任免について他の諸史料に見られない詳細な情報が含まれている。とりわけ、同時代史料として最も内容が豊かなジエラルド・ザードと、それに次ぐルトフィー・パシャ、そして『ルステム・パシャ史』等の記述があるいは終り、あるいは非常に簡略なものとなる回曆九六〇年代以降の部分について、信頼性にはやや問題は残るが独自の情報を多く含んでいる。それゆえ、やや注意を要するが、検討の対象として採用した。

(六) 史料に準ずる価値を有する著作

1 Joseph von Hammer-Prugstall, *Geschichte des Osmanischen Reiches*, 10 vols., 1st ed., Budapest, 1827-1835., Rep. ed., Graz, 1963.

(以下、GORと略記する。)

一九世紀前半のオーストリアの東洋学者ハンメル・プルグスタール(西暦一七七四—一八五六年)の手になるオスマン朝通史。一八世紀末までを含む。外国人の手になる近代の著作ではあるが、一方で記述史料を中心としてはいるもののオスマン朝側の史料を数多く利用し、他方ではヴェネツィア史料等の西欧側史料をも広汎に利用している。スレイマン大帝の時代は第三巻で扱われている。この巻でも、現在でも未だ刊行されていない多数の年代記歴史書の写本を殆ど網羅的に利用している。西欧近代史学成立以前の時代に属するこの著作は、しばしば史料批判の不十分さをもって批判されるが、第三巻について見る限り、記述にあたっておおむね最も信頼度の高い史料を用いるべく史料の取捨選択にも意をもちいており、基本的には今日もなおその価値を失っていない。それに加えて、史料の典拠が明示されているので、未刊の諸史料についても本文と註を対照することによってある程度それらの史料の内容をうかがい

得るといふ利点をも有している。スレイマン時代史に関しては、ハンメルは、ジェラルド・ザーデ、ムスタファ・アリ、フェルデー（後に述べるが現在ではボスタンという人物の作といわれる）を中心に、セラニキーそしてペチエヴィーといったスレイマン大帝時代史に関する記述史料の中では最良の部分に依拠して論述を進めており、多くの貴重な情報を含んでいる。

本稿においては、ハンメルの本書に対し、オスマン朝側の同時代史料に次ぐ重点を与え、オスマン朝側の後代の編纂物の史書よりはむしろ本書を遥かに広汎に利用する方針をとった。なお本書には、未完のオスマン語訳があり、独自の訳註を含むことがあるため、随時比較対照のためにこのオスマン語訳本も利用した。オスマン語訳は未完で全一卷となっているが最後の第一巻のみは、ローマ字表記の現代トルコ語で刊行されている。

1-a Hammer, Devlet-i-Osmaniye Tarîhi, tr. by Ata Bey, 11 vols, Istanbul, 1330-1335, and 1947.

(以下 Hammer Tarîhi と略記する。)

なお、このオスマン語訳の『ハンメル史』ではスレイマン大帝時代史は、第五巻全巻と第六巻前半にあたる。

(七) むすび

以上で、本稿執筆にあたり使用した主要史料の紹介を終えることとする。本節で特に採り上げなかつた諸史料については、随時、註において解説を加える。次節においては、まず、スレイマン大帝時代のすべての大宰相及び宰相職就任者を確定する作業を行うこととしよう。

1 本節では、簡単な史料紹介を目的とするため、個々の史家に関しては敢えて註を附さないこととする。個々の史家と史書に

については、とりあえず今なおその価値を失わないバービンガーの次の著書を参照されたい。

Franz Babinger, *Die Geschichtsschreiber der Osmanen und Ihre Werke*, Leipzig, 1927.

なお、邦文では濱田正美氏の次の史料紹介が簡にして要を得ている。あわせて参照されたい。

濱田正美「トルコ」、『アジア歴史研究入門』第四卷、同朋舎出版（昭和五九年）、六七七—六九九頁。

2 İsmail Hakkı Uzuncarsılı, "Onaltıncı Asır Ortalarında yaşamış olan İki Büyükt Şahsiyet Tosyah Celalzade Mustafa ve Salih Çelebiler", *Bellekten*, Vol. XXII, No. 87., 405.

3 Ramazanade, 239-241.

4 このリプリント版は、旧刊本をそのまま刻したうえ、新たに序文と索引を附してある。本稿においては、紙質の関係もあり、復刻版を利用した。

5 この部分は、大宰相列伝 (Peçevi, I, 20-28) と、大宰相職には到達しえなかった宰相たちの列伝 (Peçevi, I, 28-31.) の二つの部分からなっている。

6 詩人列伝についてさらに詳しくは、次の文献を参照されたい。

Ağah Sırrı Levend, *Türk Edebiyatı Tarihi*, I, Ankara, 1973, 251-286.

7 Akâ'î, I, 103-105.

三 大宰相及び宰相職就任者の確定

(一) 回曆九二六年から九四二年まで

スレイマン大帝の父、オスマン朝第九代のセリム一世が、回曆九二六年シェツヴァル月八日（西曆一五二〇年九月二一日）に没したとき、帝国中央の宰相としては、大宰相ピリー・メフメット・パシヤ Piri Mehmed Paşa、第二宰相チョバン・ムスタファ・パシヤ Coban Mustafa Paşa<sup>(1)</sup>、そして回曆九二六年にルメリ・メイレルメイスイ Rumeili Beylerbeyisi から宰相に任ぜられたばかりのフェルハト・パシヤ Ferhad Paşa<sup>(2)</sup>の三人が在職していた。

スレーヤーの『シジツリ・オスマーニー』の宰相表では、この時点における帝国中央の宰相としては、大宰相ピリー・メフメット・パシヤと宰相チョバン・ムスタファ・パシヤの二人のみが挙げられ、フェルハト・パシヤについての言及を欠く<sup>(3)</sup>。フェルハト・パシヤについては、わずかに本篇中の「フェルハト・パシヤ」の項目で、スレイマン大帝の治世に入ってから回曆九三〇年に、第三宰相に任ぜられ、後に職を免ぜられてセメンドレ・サンジャウ Sennedre Sancagi を与えられたもののこれも奪われ回曆九三二年ムハッレム月にエディルネ Edirne で処刑されたと述べられているとどまる<sup>(4)</sup>。

しかし、フェルハト・パシヤについてスレーヤーの述べるところは、セリム一世の没する前後に第三宰相として在職したフェルハト・パシヤについてジェラルル・ザイデヤルトフィー・パシヤ<sup>(5)</sup>が語るところとほぼ一致するから、この

フェルハト・パシヤが同一人物であることに疑いはない。とすれば、スレヤーは、フェルハト・パシヤの項目の記述でその宰相任命の時期について誤ったうえに、宰相表においては、フェルハト・パシヤの存在自体を書き落したのである。

スレイマン大帝は、回曆九二六年シェツヴァル月一七日（西曆一五二〇年九月三〇日）に、父セリム一世の跡を襲ってオスマン朝第一〇代のスルタンとして即位するにあたり、セリム一世以来の三名の宰相をそのまま引き継いだ。しかし、まもなく、おそらくは同年中に、王子時代の傳育掛（ララ Lala）であった、コジャ・カスム・パシヤ Koca Kasım Paşa を宰相に任じた。<sup>(8)</sup> コジャ・カスム・パシヤについては、ジェラール・ザーデ、ルトフィー・パシヤは何も述べていないが、ペチエヴィーの宰相列伝によれば、その後、高齢のゆえをもって引退し、セラニキ・サンジャウ Selanik Sancagi を隠居料として与えられたという。<sup>(9)</sup> 引退の時期は定かでないが、ここで、フォラーの翻訳出版した『ルステム・パシヤ史』の中に、「ナト、スィム・パシヤ Nasim Pascha」なる人物についての記事がある。フォラーの訳文によれば「ナト、スィム・パシヤは、老齢のゆえをもって引退を願ひ、これを許された。<sup>(10)</sup>」とある。オスマン語の写本の原本を今のところ参照しえなかつたので断定することを得ないが、アラビア文字の「カーフ」と「スン」は、時にまぎらわしく、この「ナト、スィム・パシヤ」なる人物は、実は「カスム・パシヤ」であった可能性が大きい。この推測が正しいとすれば、この記事は引退の時期を確定する手がかりたりうる。引退の記事は、スレイマン大帝のベオグラード遠征からイスタンブルへの帰着（回曆九二七年ジルカッデ月一七日<sup>(11)</sup>）の記事と、同じく回曆九二七年の出来事であるアト・メイダヌ At Meydanı（ビザンツ時代のヒッポンドウローム）のイブラヒム・パシヤ宮殿（イブラヒム・パシヤ・サライ Ibrahim Paşa Sarayı）の完成<sup>(12)</sup>の記事との間におかれている。それゆえ『ルステム・パ

『シヤ史』の記年法がやや雑であることから一抹の疑問が残るが、コジャ・カスム・パシヤの引退を一応回曆九二七年のことと見ておく。

なお、カスム・パシヤについては、史料に乏しいうえに、このカスム・パシヤの他にほぼ前後する時期に活躍したジェゼリー・カスム・パシヤ Cezeri Kasım Paşa やキョセルジェ・カスム・パシヤ Güzelce Kasım Paşa やうらうらの人物が存在するために、しばしば三者が混同される<sup>(13)</sup>。スレヤーは宰相表で、回曆九二六年にカスム・パシヤなる人物が宰相に任ぜられ翌九二七年に引退したと記している<sup>(14)</sup>。その限りでは問題はないが、スレヤーは、本篇の項目論文の中では、このカスム・パシヤを「カスム・サーフィー・パシヤ Kasım Safi Paşa」とし、またの呼び名を「コジャ Koca」あるいは「ジェゼリー・ザーデ Cezirizade」としている。そして、この人物は、第八代バヤズィット二世時代に財務長官 (デフテルダル Defterdar) を勤めセリム一世の王子時代及びスレイマン大帝の王子時代に傳育掛 (ララ) を勤めたのち、スレイマン大帝即位後に宰相に任ぜられたが高齢のゆえにブルサ Bursa を隠居料として与えられ、回曆九五〇年頃に没したと述べたのち、詩人でもあったとしている<sup>(15)</sup>。確かに、サーフィーの雅号 (マフラス Mahlas) を有するジェゼリー・カスム・パシヤ Cezeri Kasım Paşa なる人物は実在し、詩人列伝の類にも記事がみえる<sup>(16)</sup>。しかし、この人物については、バヤズィット二世の傳育掛を勤め、バヤズィット二世の即位後に宰相にとりたてられたと詩人列伝類は述べており<sup>(17)</sup>、スレイマン大帝時代に宰相に任ぜられたという記事は見えない。それゆえ、スレヤーはこのジェゼリー・カスム・パシヤとコジャ・カスム・パシヤが実は別人であるのに混同したものかと思われる<sup>(18)</sup>。

おそらくは回曆九二七年中に引退したと見られるこのコジャ・カスム・パシヤの後任としては、それまでルメリ・



ペイレルベイスイであったハーイン・アフメット・パシヤ Hain Ahmed Paşa が宰相に任ぜられた<sup>(19)</sup>。この任命にあたり、アフメット・パシヤが第何番目の宰相に任ぜられたのかは史料に述べられていない。他にセリム一世時代以来の三人の宰相がなお在任していたのであるが、ジェラルル・ザーデの回曆九二八年ラマザン月の条に第三宰相として現れているから、第三宰相に任ぜられたようである<sup>(20)</sup>。スレヤールの宰相表では、カスム・パシヤの後任は、ギュゼルジエ・カスム・パシヤとされ、アフメット・パシヤは、回曆九二八年にチョバン・ムスタファ・パシヤの後任として宰相に任ぜられたとあるがいずれも誤りである<sup>(21)</sup>。

回曆九二八年に入り、スレイマン大帝の生涯における第二回目の親征であるロドス島攻略が開始されたが、遠征中の同年ジルヒツジエ月二日になって、セリム一世がエジプト(ムスル Misr)の行政を委ねたマムルーク朝の遣臣ハイル・バイ Hayir Bay の逝去の報がもたらされ、翌三日に第二宰相チョバン・ムスタファ・パシヤがムスル・ペイレルベイスイ Misir Beylerbeyisi に任ぜられた<sup>(22)</sup>。この際、ムスタファ・パシヤは、宰相位を保持したままエジプトに赴いたようであるが、帝国中央における第二宰相の地位をそのまま保持していたのかどうかは、いま一つ明確でない。第三宰相であったと思われるアフメット・パシヤが第二宰相に昇格したと見る方が自然であろうか<sup>(23)</sup>。

翌回曆九二九年に入りロドス島征服に成功してイスタンブルに帰還したのち、シャーバン月一三日になって、先帝以来の遺臣である大宰相ピリー・メフメット・パシヤが職を免ぜられ、その後任にはイブラヒム・アー Ibrahim Ağa が任ぜられ、イブラヒム・パシヤ Ibrahim Paşa となった<sup>(24)</sup>。イブラヒム・パシヤは、スレイマンの王子時代以来の寵臣であり、宮廷の小姓(イチ・オウラン İc Ođlan) 出身で任命当時は、内廷(エンデルン Enderun) におけるスルタンの私室の奉仕者たちの長(ハス・オダバシユ Has Odabası) ないしオダバシユ Odabası) で宮廷の鷹匠の長

(イチ・ドーアンジュ・バシユ Ic Doganci bası) を兼務していた<sup>(25)</sup>。この任命は、大宰相は宰相たちの中から任命するという当時の慣行に反する異例の人事であった<sup>(26)</sup>。イブラヒム・パシヤは、このときルメリ・ベイレルベイスイ職をも併せて与えられた<sup>(27)</sup>。

ピリー・メフメット・パシヤの罷免とはほぼ同じ頃、宰相フェルハト・パシヤもまた、かつてアナトリアに派遣された際に行ったさまざまの圧政の責任を問われて職を免ぜられた<sup>(28)</sup>。こうして回曆九二九年中に、帝国中央では、セリム一世以来の宰相たちは姿を消し、スレイマン大帝自身の任命した二人の宰相たち、すなわち大宰相イブラヒム・パシヤと宰相ハーイン・アフメット・パシヤが残った。

ハーイン・アフメット・パシヤは、ピリー・メフメット・パシヤ罷免以前から大宰相就任を強く望んでいた<sup>(29)</sup>。しかし、その望みに反し、イブラヒム・パシヤが大宰相に就任したため、先帝の時代に征服されてオスマン朝領となつて未だ日の浅い極めて重要な領土であるエジプトの統治者、ムスル・ベイレルベイスイとなることとなつた<sup>(30)</sup>。それ以前に、ムスル・ベイレルベイスイ職に前年に任命されていた宰相チヨバン・ムスタファ・パシヤがイスタンブルに呼びもどされることとなり、その後任には、アナドル・ベイレルベイスイであつたギユゼルジェ・カスム・パシヤが既に任命されていた<sup>(31)</sup>。しかし有力な宰相アフメット・パシヤの処遇をめぐり、カスム・パシヤは僅かな期間在職しただけで解任され<sup>(32)</sup>、回曆九二九年ラマザン月六日にハーイン・アフメット・パシヤがムスル・ベイレルベイスイに任ぜられ、同月二〇日にエジプトに向かった<sup>(33)</sup>。他方、先にエジプトから呼びかえされていたチヨバン・ムスタファ・パシヤは、その後、イスタンブル中央の宰相に戻ることにつた<sup>(34)</sup>。

これより先、すでに述べたようにイブラヒム・パシヤは、大宰相任命に際しルメリ・ベイレルベイスイも併せ与え

られた。その直前にこの職にあったのはアヤス・パシヤ *Ayas Pasa* であつたが、アヤス・パシヤはルメリ・ベイレルベイスイ職を失つたのち、任命の日附は詳かでないが、ほどなく宰相に任ぜられたものと見られる。<sup>(36)</sup>

エジプトから帰任したかつての第二宰相チョパン・ムスタファア・パシヤと、新任の宰相アヤス・パシヤの序列については、ジェラルル・ザードは回曆九三〇年レジェプ月の条でアヤス・パシヤを第二宰相と記し、九三二年の条ではムスタファア・パシヤを第二宰相、アヤス・パシヤを第三宰相としており、いま一つ明確でない。<sup>(37)</sup> おそらくは少なくともムスタファア・パシヤの帰京後は、ムスタファア・パシヤが第二宰相に戻つたのであろう。ともあれ、史料の上でも、回曆九三二年から九三五年までの間、宰相間の序列としては大宰相イブラヒム・パシヤ、第二宰相チョパン・ムスタファア・パシヤ、第三宰相アヤス・パシヤの順で、合計三人の宰相が帝国中央に存在していたことに疑いはない。

回曆九三五年シャーバン月一八日に第二宰相ムスタファア・パシヤが没し、この欠を補うべく、この頃ルメリ・ベイレルベイスイに昇進していた、元ムスル・ベイレルベイスイ、ギユゼルジェ・カスム・パシヤが宰相に任ぜられた。<sup>(40)</sup> この際、第三宰相アヤス・パシヤが第二宰相に進み、<sup>(41)</sup> カスム・パシヤは、第三宰相に任ぜられたものと思われる。

この点に関し、スレヤーは本篇中のギユゼルジェ・カスム・パシヤの項目では、九三五年に第三宰相となつたと述べているが、<sup>(42)</sup> 宰相表では、この年に第二宰相となつたとし、宰相表と項目論文との間で記述が矛盾している。

数年にわたつて続いた大宰相イブラヒム・パシヤ、第二宰相アヤス・パシヤ、第三宰相ギユゼルジェ・カスム・パシヤという体制は、回曆九四二年に至り大きく変化することとなつた。

## (二) 回曆九四二年から回曆九六〇年まで

回曆九四〇年から九四二年にかけては、スレイマン大帝の第六回目の親征にあたる大規模なイラン・イラク遠征が行われ、イランのサファヴィー朝勢力を抑え、バグダード征服に成功したが、この大遠征から帰還して間もない回曆九四二年ラマザン月二二日に、一〇年以上にわたってスレイマン大帝の信任をほしいままにしてきた大宰相イブラヒム・パシヤが、突如宮廷内で処刑されるという事件が起つた<sup>(43)</sup>。その原因としては、東方遠征中のイブラヒム・パシヤのいくつかの専横のふるまいがあげられている。しかし、後宮の勢力の動きもからんでいたようである。

イブラヒム・パシヤの処刑後、大宰相職は、第二宰相アヤス・パシヤに与えられた<sup>(44)</sup>。ハンメルは、空席となった第二宰相には、カスム・パシヤが昇格したが、まもなく職を免ぜられ、その後任には前ルメリ・ベイレルベイスイ、ムスタファ・パシヤが任命されたと述べている<sup>(46)</sup>。この点について、ハンメルは、その典拠の一つとしてフェルディアー Ferdi の『スレイマン・ナーメ Sileymanname』を挙げて<sup>(47)</sup>いる。この書は未刊であるが、現代トルコの史家ユルドアイドゥンが、その著者をフェルディアーではなくボスタン Bostan という人物であると訂正した上で、内容の紹介を行っている<sup>(48)</sup>。この紹介によれば、このムスタファ・パシヤは、回曆九三三年(西曆一五二七年)にアヴロンヤ・ベイ Avlonya Beyi (すなわちアヴロンヤのサンジャク・ベイ) からカプダン Kapudan (大提督) に任ぜられた人物だとい<sup>(49)</sup>う。ここで、メティン・クント教授が編集刊行した回曆九三三年(西曆一五二七年)に作製されたと推定される帝国全土の行政区画表を検するに、当時、カプダンに与えられるのが例であったダーダネルス海峡に面したゲリボル・サンジャウウ Gelibolu Sancagi の主は、ブラク・ムスタファ・ベイ Pulak Mustafa Bey となっている<sup>(50)</sup>。このことから、

この時宰相に任ぜられたとハンメルというフェルデイー（すなわちボスタン）が主張する人物は、ブラク・ムスタフ  
ア Pulak Mustafa であつたと見てよからう。ブラク・ムスタフアについては、ペチュヴィイーもその宰相列伝の中で、  
具体的年代は示していないが、宰相職就任者の一人として扱っている<sup>(51)</sup>。また、ラマザン・ザードも、カスム・パシヤ  
の宰相職からの罷免につづき「——ヤユラク（ユラク）・ムスタフア・パシヤに宰相職が与えられ——」と述べてい  
る。このユラク・ムスタフア・パシヤはブラク・ムスタフア・パシヤと同一人物と考えられる<sup>(52)</sup>。それゆえ、このとき、  
カスム・パシヤに代つて帝国中央の宰相に任ぜられたムスタフアなる人物は、ブラク・ムスタフア・パシヤであつた  
と断じてよからう。こうして、カスム・パシヤ罷免後は、帝国中央には大宰相アヤス・パシヤと宰相ムスタフア・パ  
シヤの二人が在任していたとみてよからう。

ここで、ルトフィー・パシヤは、その著書の回曆九四三年の条で「アナドル・ベイレルベイスイ、ハードウム・ス  
レイマン・パシヤをつれていつて宰相とし、それから宰相の名をもってムスル（エジプト）に送り、ヒユスレウ・パ  
シヤをムスルから解任した。と述べている<sup>(53)</sup>。しかし、このハードウム・スレイマン・パシヤ Hadim Süleyman Paşa  
への宰相職の授与は、スレイマン・パシヤがまもなく同年中にエジプトに赴任したところからみて、帝国中央の正規  
のダーヒル・ヴェジリー（内の宰相）への任命というよりは、むしろムスル・ベイレルベイスイ就任を前提として、  
ハリチュ・ヴェジリー（外の宰相）に任じたと見る方が当を得ているかと思われる。

正規のクツベ・ヴェジリーとしては、回曆九四三年中に、ルメリ・ベイレルベイスイであつたルトフィー・パシヤ  
Latfi Paşa が宰相に任ぜられた<sup>(54)</sup>。こうして、以降、帝国中央には、大宰相アヤス・パシヤ、第二宰相ブラク・ムス  
タフア・パシヤ、第三宰相ルトフィー・パシヤの三人が在任することとなり、この体制が、回曆九四五年初めに、第

二宰相ムスタファ・パシヤが没するまで続いた。

回曆九四五年ムハッレム月に、第二宰相ブラク・ムスタファ・パシヤが没すると、<sup>(55)</sup>第三宰相ルトフィー・パシヤが第二宰相に進み、ルトフィー・パシヤの後任には、ルメリ・ベイレルベイスイ、メフメット・パシヤが任ぜられた。<sup>(56)</sup>

このメフメット・パシヤは、ソフ Sofu・ハッジハ Hacı・エル・ハッジ El-Hac の異名をもって知られる人物である。

翌回曆九四六年サーフェル月二六日になって、大宰相アヤス・パシヤが疫病のために急死し、<sup>(57)</sup>かわって大宰相には、第二宰相ルトフィー・パシヤが昇進した。<sup>(58)</sup>こうして帝国中央の宰相は、大宰相ルトフィー・パシヤと、アヤス・パシヤ時代に第三宰相であったソフ・メフメット・パシヤの二人となったが、この年のうちにハードウム・スレイマン・

パシヤとルステム・パシヤ Rüstem Paşa の二人が新たに宰相に任ぜられて、帝国中央の宰相の数は四名となった。

このうち、ハードウム・スレイマン・パシヤは、先に宰相位をもってエジプトに送られたことについて言及した人物である。スレイマン・パシヤは、この任命の前年の回曆九四五年に、大艦隊を率いてインドへの遠征を敢行し、その壮挙を祝して宰相に任ぜられたのであった。

ここで、九四六年に任命されたこれら二人の宰相の任命の時期は、詳かでない。当事者の一人ルステム・パシヤの著作であるとも伝えられる、いわゆる『ルステム・パシヤ史』の述べるところに従えば、ルステム・パシヤは、アヤス・パシヤの死去にともない、同年、アナドル・ベイレルベイスイから宰相に任ぜられたとする。<sup>(59)</sup>その日附には言及されていないが、この記事は、サーフェル月末のアヤス・パシヤの逝去の記事と、その翌月にあたるレビー・ウル・エツヴェル月下旬のヴェネツィアからの使節の到来の記事の間におかれており、これからみると、サーフェル月二六日からレヴィー・ウル・エツヴェル月下旬までの間に任命もまた行われたようにも見える。他方、『ルステム・パシヤ

史』の、ハードウム・スレイマン・パシヤに関する記事では、一時ブルサ方面に狩獵旅行に出かけていたスレイマン大帝がこの年のレジェプ月一日に帰京したところ、「そこへスレイマン・パシヤがインド遠征から帰還し<sup>66</sup>」、スレイマン・パシヤにも宰相職が与えられ、帝国中央の宰相は、ルトフィー・パシヤ、スレイマン・パシヤ、メフメット・パシヤ、ルステム・パシヤの四人となったとあり、ついでレジェプ月二日の記事に入る<sup>67</sup>。これらの記述からすると、まず年初にルステム・パシヤが第三宰相に任ぜられ、その後、レジェプ月に入ってハードウム・スレイマン・パシヤが第二宰相に任ぜられて、順送りとなり、ルステム・パシヤが第四宰相となったかに見える。

しかし、トプカプ宮殿附属古文書館目録に従えば、回曆九四六年レビー・ウル・アフル月附の「第八〇番」文書に、証人として大宰相ルトフィー・パシヤとともに、宰相としてスレイマン・パシヤ、メフメット・パシヤ、ルステム・パシヤの名が挙げられているという<sup>68</sup>。もし、この目録の記述が正しいとすれば、ハードウム・スレイマン・パシヤの宰相就任の時期は、レジェプ月よりはるかに早く、サーフェル月二六日から、レビー・ウル・アフル月内までの間にあたることとなる。

ここで、スレイマン・パシヤのインド遠征からの帰路の足どりを追うと、前年の回曆九四五年シェヴアル月二二日にジェツダに帰港し、艦隊と別れて自らはメッカ巡礼に向かったという<sup>64</sup>。正式のハッジ(巡礼)は、回曆の第十二月目にあたるジルヒツジェ月の前半に行われるから、ハードウム・スレイマン・パシヤも、ジェツダ到着の翌々月の正規の巡礼に参加したのであろう。その後、スレイマン・パシヤは、一般の巡礼たちとともにエジプトに向かい、ここからイスタンブルに帰還したという<sup>66</sup>。メッカ・カイロ間は陸路でも約三五日の行程だったといわれ、カイロからイスタンブルへも一ヶ月余りで優に到達しえたようであるから、スレイマン・パシヤが回曆九四六年サーフェル月末に

はイスタンブルに到達していた可能性もあり得ることとなり、古文書目録の記述とからんで、その宰相就任の時期には疑問が残る。<sup>(69)</sup>

ともあれ、回曆九四六年レジェプ月に行われた王子バヤズット Beyazid の割礼の祝宴には、四名の宰相が揃って参加しており、その序列は、大宰相ルトフィー・パシヤ、第二宰相ハードウム・スレイマン・パシヤ、第三宰相メフメット・パシヤ、第四宰相ルステム・パシヤの順であった。<sup>(70)</sup>この四名の宰相の体制は、回曆九四八年に至るまで変わらなかった。ただ、この月の一五日に、ルステム・パシヤが、スレイマン大帝と、スレイマン大帝の最愛の寵妃ヒュッレム・スルタン Hürrüm Sultan との間に生まれた娘であるシフリヌー・スルタン Mihrimah Sultan を娶り皇婿(ダーマド・シエヒリヤリ Damad-ı Şehirci)となったといわれる。<sup>(71)</sup>このためもあってか、この四人の宰相のうち、第三位だったメフメット・パシヤと第四位のルステム・パシヤとの順列は、この回曆九四六年レジェプ月から回曆九四八年までの間に逆転したようである。

回曆九四八年に入り、大宰相ルトフィー・パシヤが職を免ぜられ、<sup>(72)</sup>第二宰相ハードウム・スレイマン・パシヤが大宰相に進んだ。<sup>(73)</sup>このとき、かつては第四宰相であったルステム・パシヤが第二宰相に就任し、かつて第三宰相であったソフ・メフメット・パシヤは、依然として第三宰相として現われている。<sup>(74)</sup>なお、ハンメルは、このとき空席となった第四宰相には、当時ルメリ・ベイレルベイスイであったデリ・ヒュスレウ・イシヤ Deli Hüsvrev Paşa が任命された<sup>(75)</sup>と述べている。

大宰相ハードウム・スレイマン・パシヤ、第二宰相ルステム・パシヤ、第三宰相ソフ・メフメット・パシヤ、第四宰相デリ・ヒュスレウ・パシヤという体制は回曆九五一年まで続いた。<sup>(76)</sup>しかし、回曆九五一年ラマザン月二五日に、



ともにあい前後してムスル・ベイレルベイスイ職に就き、その頃から互いに非友好的關係にあつたといわれる大宰相  
ハードウム・スレイマン・パシヤと第四宰相ヒュスレウ・パシヤが、御前會議でスルタン、スレイマンの面前で激し  
く争い、共に罷免されてこの体制は大きく変化した。<sup>(77)</sup>

ラマゼン月中に、大宰相には、第二宰相ルステム・パシヤが進み、空席となつた第三宰相、第四宰相には、それぞ  
れルメリ・ベイレルベイスイ、アフメット・パシヤ Ahmed Pasa とアナドル・ベイレルベイスイ、イブラヒム・パ  
シヤ Ibrahim Pasa が新たに任命された。<sup>(78)</sup> 新しい第三宰相は、後に大宰相にまで昇つたカラ・アフメット・パシヤ  
Kara Ahmed Pasa であり、<sup>(79)</sup> 第四宰相のイブラヒム・パシヤは、ハードウム・イブラヒム・パシヤ Hadim Ibrahim  
Pasa である。<sup>(80)</sup> なお、これまで第三宰相であつたソフ・メフメット・パシヤに対するこの時の処遇については史料に  
記述がないが、その後、ほぼ一貫して第二宰相として現われるから、<sup>(81)</sup> この時に第二宰相に昇進したものと見てよいで  
あらう。

回曆九五四年ジルカッデ月上旬に至つてもなお、大宰相ルステム・パシヤ、宰相としては、メフメット・パシヤ、  
アフメット・パシヤ、イブラヒム・パシヤがこの順の序列で在職してゐた。<sup>(82)</sup> しかし、その直後、同じくジルカッデ月  
中に、白人宦官長(カプ・アースイ Kapı Ağası) ハイダル・パシヤ Haydar Pasa が宰相に任ぜられた。この任命の  
日附については、『ルステム・パシヤ史』では、ジルカッデ月二二日とあり、<sup>(83)</sup> ギョクビルギン教授の引用する著者不  
明のオスマン史の一写本によれば、ジルカッデ月一〇日であるという。<sup>(84)</sup> この二つの日附のいずれが正しいかを断定し  
得る史料を見出し得ない。しかし、いずれにせよ、ジルカッデ月の一〇日以降、同月中に任命が行われたことは確實  
と考える。その際、ハイダル・パシヤが第何位の宰相に任ぜられたのかについては、両史料とも何も述べていないが、

この時点で第二宰相の地位にあったソフ・メフメット・パシヤが職を免ぜられて宰相が四名となった後、数年を経た回曆九六〇年に至っても、なお、第四宰相にとどまっていたことから見<sup>(85)</sup>て、ハイダル・パシヤは、宰相任命にあたっては、最下位の第五宰相に任ぜられたものと見たい。

その後、回曆九五六年に至り、これら五人の宰相のうち、最も古くから宰相職に在任してきたソフ・メフメット・パシヤが宰相職を失うこととなった。その前年、回曆九五五年に、スレイマン大帝は、サファヴィー朝の王子エルカス・ミルザ Eikas Mirza のオスマン朝への亡命を好機として、イランへの親征を試みた。ソフ・メフメット・パシヤも、第二宰相としてこの遠征に加わり、スレイマン大帝のハレブ Haleb (アレppo Aleppo) 滞在中に、本隊と分かれて一軍とともにバクダッドに派遣された<sup>(86)</sup>。この頃、亡命者エルカス・ミルザもバクダッドに滞在していたが、メフメット・パシヤはエルカス・ミルザを監視する任にもあたっていたようである。回曆九五六年ジェマージー・エル・アフルル月七日に、エルマル Eimahl の宿營地に到着したスレイマン大帝から、その下に来るように招かれたエルカス・ミルザは、この招きに応ぜず、かえってクルド系の土豪の下に奔った<sup>(87)</sup>。バクダッドでエルカス・ミルザを監視する立場にもあったと思われるソフ・メフメット・パシヤは、この事件の責任を問われて宰相の職を免ぜられたと『ルステム・パシヤ史』は伝えている<sup>(88)</sup>。ソフ・メフメット・パシヤの宰相罷免の時期は明かでないが、回曆九五六年にエルカス・ミルザ出奔事件が起つてまもなくのことであつたと思われる。

以後、回曆九六〇年に至るまで、大宰相ルステム・パシヤ、第二宰相カラ・アフメット・パシヤ、第三宰相ハードウム・イブラヒム・パシヤ、第四宰相ハードウム・ハイダル・パシヤという体制が続くこととなった。

なお回曆九四二年から九六〇年に至る大宰相・宰相の変遷についての考証を終えるにあたり、この時期に関するス

レヤーの宰相表について一言しておく。

(三) スレヤー「宰相表」の検討——(一)

スレヤーは、その宰相表において、大宰相イブラヒム・パシヤが在任中の回曆九四一年にカスム・パシヤが引退し、これに代つて、従来からの宰相アヤス・パシヤに加えて、ルトフィー・パシヤが宰相に任ぜられたとする。そして、回曆九四二年に大宰相イブラヒム・パシヤが処刑されると、代つてアヤス・パシヤが大宰相、ルトフィー・パシヤが第二宰相に進み、新たにハードウム・イブラヒム・パシヤが第三宰相に任ぜられたとする。そして回曆九四四年に至つて大宰相アヤス・パシヤが没し、ルトフィー・パシヤが大宰相、ハードウム・イブラヒム・パシヤが第二宰相に進み、新たにヒュスレウ・パシヤが第三宰相となつたと述べている。

しかし、カスム・パシヤが宰相職を離れたのは実際には、既にみたように大宰相イブラヒム・パシヤ処刑後のことであり、ルトフィー・パシヤの宰相就任も同じく処刑後の回曆九四三年のことである。また、ハードウム・イブラヒム・パシヤの宰相就任は、すでにみたように実際にははるかに後の回曆九五一年のことであり、回曆九四七年にはなお白人宦官長(バーブ・ウツ・サーデ・アースイ Bab-ü-Sade Ağsa)であつた。<sup>(93)</sup>ヒュスレウ・パシヤも、当時はまだ各地のベイレルベイ職を歴任しており、宰相となるのは漸く九四八年のことである。<sup>(94)</sup>またスレヤーは、プラク・ムスタファ・パシヤについて何もふれていない。<sup>(95)</sup>

スレヤーは宰相表の中でさらにその後、ハードウム・イブラヒム・パシヤが引退し、これに代つてハードウム・スレイマン・パシヤが第二宰相となつたとし、スレイマン・パシヤの宰相就任の時期を、本篇のスレイマン・パシヤの項

目で回曆九四五年レビー・ウル・エツヴェル月にエジプトから帰京した後のこととして<sup>96)</sup>いる。しかし、ハードウム・スレイマン・パシヤの宰相就任も、前述のように実際には回曆九四六年のことに属する。

スレーヤーの宰相表では、回曆九四七年に入り、大宰相ルトフィー・パシヤが罷免されて、大宰相スレイマン・パシヤ、第二宰相ヒュスレウ・パシヤ、第三宰相ソフ・メフメット・パシヤとなり、九五〇年に至りムステム・パシヤが宰相に加わったとする。しかし、実際には、ルトフィー・パシヤ罷免の年は、回曆九四八年であり、九四七年にすでに第二宰相として挙げられているヒュスレウ・パシヤは実際には九四八年に宰相に列した。また、スレーヤーが、このとき初めて宰相として言及しているソフ・メフメット・パシヤの宰相就任は、実際には回曆九四五年のことであり、スレーヤー自身も本篇のソフ・メフメット・パシヤの項目論文では、九四四年に宰相に列したとして<sup>97)</sup>いる。スレーヤーが回曆九五〇年に初めて宰相に任ぜられたとするルステム・パシヤも実際には、九四六年に宰相に就任している。

スレーヤーは、その後、回曆九五一年に至り、大宰相スレイマン・パシヤが第二宰相ヒュスレウ・パシヤと争って共に罷免され、ルステム・パシヤが大宰相、ソフ・メフメット・パシヤが第二宰相となり、新たにハードウム・ハイダル・パシヤが第三宰相に任ぜられ、その後、さらにカラ・アフメット・パシヤが新たに第四宰相となったとする。この記述も、実際にはスレイマン・パシヤ時代にも、第二宰相がルステム・パシヤでヒュスレウ・パシヤは第四宰相であったのであるし、ハイダル・パシヤの宰相就任は回曆九五四年が正しい。九五一年には、新たにカラ・アフメット・パシヤが第三宰相、ハードウム・イブラヒム・パシヤが第四宰相に任ぜられたとするのが正しい。

スレーヤーはまた、回曆九五二年にソフ・メフメット・パシヤがバクダッドに派遣されて中央の宰相職から離れたと

見ているようであるが、九五六年に宰相を免ぜられたと見るのが正しい。ソフ・メフメット・パシヤのバクダッド派遣の記事にひきつづき、スレヤーは、「カラ・アフメット・パシヤが宰相となった」と記しているのは、その上の行に同じカラ・アフメット・パシヤの第四宰相就任の記事がみえるから、単なる誤記であろう。以上、この時期に関し、スレヤーの宰相表が、多くの誤りを含んでいることを明かとした。

#### 四 回曆九六〇年から回曆九七四年まで

回曆九六〇年サーフェル月中旬において、オスマン朝中央の宰相は、大宰相ルステム・パシヤ、宰相アフメット・パシヤ、イブラヒム・パシヤ、ハイダル・パシヤの四名であった。<sup>(98)</sup>この年のラマザン月に、スレイマン大帝は、その生涯における第一二番目の親征の兵をおこし、イランに向かった。「ナフチヴァンの役 *Nahçıvan Seteri*」として知られるこの遠征に際し、スレイマン大帝は、シエツヴァル月二十七日に陣中に父スレイマン大帝を訪れた王子ムスタフア *Mustafa* を処刑した。この処刑は、スルタン位継承をめぐる陰謀の結果であったといわれるが、<sup>(99)</sup>処刑の直後に、オスマン軍内部で信望の厚かった王子ムスタファの処刑に対する不満がイエニチエリ軍団に高まり、同日中にこの処刑の元凶と目される大宰相ルステム・パシヤが罷免されることとなった。<sup>(100)</sup>このとき、同時に、宰相ハイダル・パシヤもまた罷免された。<sup>(101)</sup>大宰相の後任としては、同じく陣中であつた第二宰相カラ・アフメット・パシヤが直ちに任命された。<sup>(102)</sup>

『ルステム・パシヤ史』には、それに引き続いて「イブラヒムが第二、カイロのヴァーリー *Vaiz* (総督) アリが第三、ルメリのベイレルベイが第四宰相に、イエニチエリのアー、ペルテウがルメリのベイレルベイに……<sup>(103)</sup>なつた。」

スレイマン大帝時代オスマン朝の大宰相と宰相たち (一)

とあり、ルトフイー・パシヤも、「アフメット・パシヤを大宰相とし、エジプト（ムスル）にいたアリ・パシヤを第三宰相（ウチュンジュ・ヴェジール *Üçüncü Vezir*）とし……。」と述べている。ジェラルル・ザーデにも同様の記事がある。<sup>(105)</sup>

これらの史料の記述から、第二宰相から大宰相に昇進したアフメット・パシヤの跡を襲って、イブラヒム・パシヤが、直ちに第二宰相に進んだことがわかる。ただ第三宰相以下の人事が行われたのは、実際にはこの事件の直後ではなく、翌回曆九六一年に入ってからであった。まず回曆九六一年ムハツレム月に、ムスル・ベイレルベイスイに在任中のセミス・アリ・パシヤ *Seniz Ali Paşa*（又は「セミン・アリ・パシヤ *Semin Ali Paşa*」）が呼び返されて、<sup>(106)</sup> 第三宰相に任ぜられた。<sup>(107)</sup> その後、スレイマン大帝は、そのまま兵を東方に進めてハレブに入り、回曆九六一年ジェエマージャー・エル・エツヴェル月六月になって、第二宰相ハードウム・イブラヒム・パシヤに、イスタンブルの守護のために帰京することを命じた。<sup>(108)</sup> ハードウム・イブラヒム・パシヤは、スレイマン大帝がナフチヴァンの役から回曆九六二年に帰京するまで、イスタンブルの守護にあたった。<sup>(109)</sup>

イブラヒム・パシヤが遠征軍を去った後、スレイマン大帝の陣中には、大宰相カラ・アフメット・パシヤと宰相セミス・アリ・パシヤが残った。イブラヒム・パシヤは、その帰京を機に、一時宰相の地位は保持しながら通例の序列の外におかれたものか、<sup>(110)</sup> これ以後、アリ・パシヤが、しばしば史料に第二宰相として現われ始める。<sup>(111)</sup>

九六一年には、ナフチヴァンの役の功によって、ルメリ・ベイレルベイスイの地位にあったソコルル・メフメット・パシヤ *Sokollu Mehmed Paşa* が宰相に任ぜられた。その日附について、ジェラルル・ザーデは何も述べていないが、記事の配列から見て回曆九六一年ラマザン月二三日からジルカッデ月一日までの間のことと推定される。<sup>(112)</sup> ソコルル・

メフメット・パシヤに関する専門の論著のある、アフメット・レフィクも、ギョクビルギン教授も、その論考の中で、宰相職への任命の日附にはふれていない<sup>(註)</sup>。ただ『年号日附記録集』には、回曆九六一年シェツヴァル月二五日附として、ミール・ミラーニ・ルメリ Mir-mirān-i Rumīi (ルメリ・ベイレルベイスイの別称) メフメット・パシヤが宰相となったとある<sup>(註)</sup>。この史料の信頼性については一抹の不安が残るが、この場合、他の諸史料から推定した任命時期の範囲内にあるから、一応、この日附を、ソコルル・メフメット・パシヤの宰相就任の日附として採用することとしたい。

ソコルル・メフメット・パシヤの宰相としての順位については、いずれの史料も宰相職への任命の記事の中では、言及していない<sup>(註)</sup>。しかし、イスタンブルへの帰還直前の回曆九六二年末の偽王子ムスタファの乱に関連して、メフメット・パシヤは「第三宰相」と呼ばれている<sup>(註)</sup>。またそれ以前にも、たとえば、回曆九六二年レジェブ月に、サファヴィー朝の講和使節の歓迎の宴が張られた際にも、宰相としての公式の順位は明記されていないが、大宰相アフメット・パシヤ、宰相アリ・パシヤについて三番目に名が挙っている<sup>(註)</sup>。これらから、ソコルル・メフメット・パシヤは、真正の第三宰相ないしは、少なくとも、イスタンブルの守護にあたっている宰相ハードウム・イブラヒム・パシヤを除いて、スレイマン大帝の陣中にある三人の宰相中の第三位の宰相の地位にあつたとみることができるといえる。

回曆九六二年ラマザン月に、スレイマン大帝がイスタンブルに帰着した時、帝国中央には大帝に同行していた三人の宰相、すなわち大宰相カラ・アフメット・パシヤ、宰相セミズ・アリ・パシヤ及びソコルル・メフメット・パシヤと、イスタンブルの守護の任にあつていたハードウム・イブラヒム・パシヤの計四名の宰相が在任していた。そして、少なくともスレイマン大帝の帰京後には、ハードウム・イブラヒム・パシヤは、第二宰相の地位を占めたようである。

あるから、これら四名の宰相の序列は、大宰相カラ・アフメット・パシヤ、第二宰相ハードウム・イブラヒム・パシヤ、第三宰相セミズ・アリ・パシヤ、第四宰相ソコルル・メフメット・パシヤとなつていたものと思われる。

この体制は、しかし長くは続かなかつた。スレイマン大帝の帰還後まもない回曆九六二年ジルカッデ月一三日に、大宰相カラ・アフメット・パシヤが突然処刑され、免官中であつた前大宰相ルステム・パシヤが大宰相に再任された。この事件の背後には、大宰相への返り咲きをねらうルステム・パシヤと、その義母でスレイマン大帝の寵愛の厚かつた妃ヒュッレム・スルタンの方策があつたといわれる。

これと相前後して、長らく宰相の任にあり、当時第二宰相の地位を占めていたハードウム・イブラヒム・パシヤが老齡のゆえをもつて引退した。こうして、帝国中央には、大宰相ルステム・パシヤ、第二宰相セミズ・アリ・パシヤ、第三宰相ソコルル・メフメット・パシヤの三人の宰相が残つた。その後まもなく、同年ジルヒツジエ月一九日になつて、かつてソコルル・メフメット・パシヤの後任としてルメリ・ベイレルベイスイに就任したペルテウ・パシヤ Pertev Paşa が、同職から宰相に新たに昇進し、帝国中央の宰相は四人となつた。この任命にあつたのペルテウ・パシヤの順位については、『年号日附記録集』に「小宰相（ヴェジリーリ・クーチェック Vezir-i Küçük とした。）とある。ヴェジリーリ・クーチェックとは最下位の宰相を意味する用語である。『ルステム・パシヤ史』にも第四宰相となつたとある。またその後もペルテウ・パシヤは第四宰相として史料に現われるから、このとき、第四宰相に任ぜられたとみてよからう。

大宰相ルステム・パシヤ、第二宰相セミズ・アリ・パシヤ、第三宰相ソコルル・メフメット・パシヤ、第四宰相ペレテウ・パシヤの体制は、その後しばらくの間続いた。そして、回曆九六五年に入り、フェルハト・ベイ Ferhad



Bay が、第五宰相に任ぜられてフェルハト・パシヤ Ferhad Paşa となった<sup>(12)</sup>。フェルハトは、スレイマン大帝の近親と結婚した際に宰相にとりたてられたといわれ、宰相となる以前は、カスタモヌ・サンジャウ・ベイ Kastamonu Sa ncağı Beyi であったという<sup>(13)</sup>。なお、宰相任命の日附については、『ルステム・パシヤ史』は明確に述べていない。しかし、『年号日附記録集』の回曆九六五年ジルヒツジェ月一六日の条に、「フェルハト・パシヤが皇嫡となった」とあり、宰相任命も、ほぼ同時期であったのではないかと思われる。

大宰相ルステム・パシヤ、第二宰相セミズ・アリ・パシヤ、第三宰相ソコルル・メフメット・パシヤ、第四宰相ペルテウ・パシヤ、第五宰相フェルハト・パシヤという体制は、回曆九六八年シェツヴァル月二八日に、大宰相ルステム・パシヤが没するまで続いた<sup>(14)</sup>。ルステム・パシヤが没すると、大宰相職には、第二宰相セミズ・アリ・パシヤが任ぜられ、第二宰相には、ソコルル・メフメット・パシヤが、第三宰相にはペルテウ・パシヤが、第四宰相にはフェルハト・パシヤがそれぞれ昇格した<sup>(15)</sup>。

その後、回曆九六八年からマルタ遠征の始まる回曆九七二年までの時期については大きな遠征にも事件にも乏しく年代記類の記事も豊富ではない。しかし、『年号日附記録集』の記事が正しいとすれば、回曆九六八年ムハッレム月二四日には、ルメリ・ベイレルベイスイの職にあったムスタファ・パシヤが第五宰相に任ぜられたという<sup>(16)</sup>。このムスタファ・パシヤは前後の事情からみて、かつてアナトリア西北部の黒海沿岸地域に独立の君侯国を有していたイスフェンディヤール İsfendiyar 家出身のクズル・アフメットの子孫で、詩人としても名高いシエムシー・アフメット・パシヤ Şemsî Ahmed Paşa の兄弟<sup>(17)</sup>。クズル・アフメットル・ムスタファ・パシヤ Kızıl Ahmetî Mustafa Paşa であることに疑いない。この人物は、他の諸史料からも、少なくとも回曆九六六年までは、ルメリ・ベイレルベイスイ

であったことが知られ、<sup>(135)</sup> 回曆九七二年には、宰相として現われマルタ遠征軍の総司令官（セルダール Serdar）となっている。<sup>(136)</sup> それゆえ、ルステム・パシャの没した回曆九六八年シェヴアル月二八日から回曆九七二年シャーバン月三〇日の間にルメリ・ベイレルベイスイから宰相に転じたのは確実であるが、他の諸史料には、宰相任命の記事がみあたらない。それゆえ、ここでは一応『年号日附記録集』に従っておく。

同じく『年号日附記録集』によれば、回曆九七〇年ジルカッデ月一三日に、ルメリ・ベイレルベイスイの任にあったアフメット・パシャが第六宰相（ヴェジリー・サーデイス Vezir-i Sadeis）に任ぜられたとある。<sup>(137)</sup> このアフメット・パシャは、明かに、後にスレイマン大帝の孫でオスマン朝第一二代のムラト三世の大宰相となったセミン・アフメット・ト・パシャ Semin Ahmed Pasa（又は Semiz Ahmed Pasa）である。<sup>(138)</sup> この人物についてもスレイマン大帝の晩年に宰相として在任していたという点では諸史料も一致しているが、その宰相任命の日附については何も言及していないので、この点についても、一応『年号日附記録集』に従っておく。

こうして、回曆九七〇年に六名に達したとみられるオスマン朝中央の宰相の数は、回曆九七二年ジルカッデ月の末に大宰相セミズ・アリ・パシャが没する<sup>(139)</sup>と、五名に減じた。大宰相には、第二宰相ソコルル・メフメット・パシャが任ぜられ、第二宰相にはペルテウ・パシャ、第三宰相にはフェルハト・パシャが昇格した。第四、第五宰相については、この際の順位をはっきり明示した史料に乏しい。ただやや後代の史料であるが、ムネツジム・バシユにはこの時、アフメット・パシャが第四宰相ムスタファ・パシャが第五宰相となったと記されている。<sup>(140)</sup> 確かに少なくとも回曆九七三年以降の記事には、アフメット・パシャが第四宰相として、ムスタファ・パシャが第五宰相として現われるようになる。<sup>(141)</sup> しかし、いつこの順位の逆転が生じたのかは、必ずしも明かでない。

この問題について考えるにあたって、一つの手懸りとなるのは、回曆九七二年のマルタ遠征が不首尾に終わり、総司令官であったムスタファ・パシヤが宰相職を免ぜられたというペチエヴィーの記事である。<sup>(145)</sup>このムスタファ・パシヤの宰相解任の時期も定かではないが、トゥラン教授は、総司令官宛命令書に依拠して、オスマン軍のマルタからの撤退の命令が発せられたのが回曆九七三年レビー・ウル・エツヴェル月二八日であったと指摘しているから、<sup>(146)</sup>おそらく、その前後に宰相解任も行われたのであろう。このムスタファ・パシヤの宰相職からの解任は、トゥラン教授も指摘しているようにごく短期間のことで、<sup>(147)</sup>九七三年中に再び宰相として現われるから、解任後まもなくムスタファ・パシヤは再び宰相に任ぜられたことに疑いはない。ただ、その際に、先任者で上位にあったクズル・アフメット・ムスタファ・パシヤの宰相としての序列が、かつては下位にあったセミン・アフメット・パシヤのそれと逆転したのではないかと推測しておくこととしたい。

回曆九七三年シエツヴァル月一日に、<sup>(148)</sup>スレイマン大帝は、その生涯における第一三回目の、そして最後の親征の兵をおこし、ハンガリーに向かってイスタンブルを出発した。ジゲットヴァルの役(Sigetvar Setai)と呼ばれるこの遠征に際し、帝国中央の宰相は、大宰相ソコルル・メフメット・パシヤ、すでに先発軍総司令官として出征している第二宰相ペルテウ・パシヤ、第三宰相フェルハト・パシヤ、第四宰相セミン・アフメット・パシヤ、第五宰相クズル・アフメットル・ムスタファ・パシヤの五名であった。<sup>(149)</sup>この最後の親征は長びいた。そして年を越した翌回曆九七四年サーフェル月二〇日(西曆一五六六年九月六日)の夜に、<sup>(150)</sup>スレイマン大帝は、ハンガリーの地で陣中に没した。そのとき、帝国中央の宰相は五名、その顔ぶれは出陣のときと全く同じであった。<sup>(151)</sup>

## (五) スレヤー「宰相表」の検討——(二)

ここで、回曆九六〇年から九七四年に至る部分のスレヤーの宰相表について簡単に検討しておく。<sup>(18)</sup> スレヤーは、回曆九六〇年にルステム・パシヤとハイダル・パシヤが同時に罷免されたとき、カラ・アフメット・パシヤが大宰相に、イスケンデル・パシヤ Iskender Pasa が第二宰相に、セミズ・アリ・パシヤが第三宰相に任ぜられたとする。<sup>(19)</sup> しかし、実際には、このとき、カラ・アフメット・パシヤが大宰相に、ハードウム・イブラヒム・パシヤが第二宰相となり、やや遅れてセミズ・アリ・パシヤが新たに宰相に任ぜられて第三宰相となったのであった。それゆえ、スレヤーのいうイスケンデル・パシヤが問題となる。ここで、『シジリ・オスマーニー』本篇のイスケンデル・パシヤの項目をみると、後にジゲットヴァルの役に際し、イスタンブルの守護に残った人物と知れる。<sup>(20)</sup> 確かに、ジゲットヴァルの役に際しては、イスケンデル・パシヤなる人物がイスタンブルの守護にあつたが、この人物は、元アナドル・ベイレルベイスイであつたことが知られているにとどまる。<sup>(21)</sup> 管見の及ぶところ、この人物がスレイマン大帝時代に帝国中央の正規の宰相となつたという確実な証拠を見出し得ない。

スレヤーはその宰相表の中で、回曆九六二年にルステム・パシヤが大宰相に再任された後には、アリ・パシヤが第二宰相、ソコルル・メフメット・パシヤが第三宰相となり、のち九六二年にペルテウ・パシヤが第四宰相となり、その後回曆九六六年になって順位不明ながら宰相として残っていたイスケンデル・パシヤが地方に出されたとする。イスケンデル・パシヤについては前述のように宰相就任自体が疑わしいが、このあたりのスレヤーの記述は、本篇のイスケンデル・パシヤの項目で、回曆九六三年レビー・ウル・アフル月にムスル・ヴァリスイとなつたとの記事とも

矛盾して<sup>(18)</sup>いる。またソコルル・メフメット・パシヤは実際には九六一年中に宰相に就任したものと見られ、スレヤーは、この点何も述べておらず問題である。ただ九六二年にペルテウ・パシヤが第四宰相となったとの記事は正しい。

スレヤー宰相表で、その後、九六七年にララ・ヒュセイン・パシヤ Lala Hisevin Pasa なる人物が第五宰相となったと記している。しかし、ララ・ヒュセイン・パシヤは、王子セリムの傳育掛を勤め、その王子がセリム二世として即位した後に初めて宰相に任ぜられており、この人物をスレヤーが宰相表でスレイマン大帝の正規の帝国中央の宰相として挙げたのは誤りであろう。スレヤーも、本篇中のララ・ヒュセイン・パシヤの項目では、王子時代のセリムの傳育掛及びヴェジールとなったと述べているにとどまる<sup>(19)</sup>。そして、回曆九六五年に第五宰相となったとみられるフェルハト・パシヤについての言及を欠く。

スレヤーの宰相表の中では、回曆九六八年に大宰相ルステム・パシヤが没したのちには、アリ・パシヤが大宰相となり、第二宰相にソコルル・メフメット・パシヤ、第三宰相にペルテウ・パシヤ、第四宰相にヒュセイン・パシヤそして、新たにクズル・アフメットル・ムスタファ・パシヤが第五宰相となったと述べられている。このうち、ヒュセイン・パシヤについては前述の通り誤りである。また、クズル・アフメットル・ムスタファ・パシヤの宰相就任も実際には回曆九六九年のことに属する。スレヤーも、本篇中のムスタファ・パシヤの項目では第五宰相就任の時期を九六九年ムハッレム月として<sup>(20)</sup>いる。

スレヤーの宰相表では、回曆九七二年に大宰相アリ・パシヤが没した後には、ソコルル・メフメット・パシヤが大宰相となり、第二宰相にペルテウ・パシヤ、第三宰相にヒュセイン・パシヤ、第四宰相にムスタファ・パシヤが進み、新たに第五宰相にはセミン・アフメット・パシヤが任ぜられたとする。そして、九七二年中にムスタファ・パシヤが

免ぜられ、新たにフェルハト・パシャが宰相に任ぜられて第五宰相となったとする。しかし、実際には、既にのべてきているように、ヒュセイン・パシャは誤りで、スレヤーが新任の宰相として挙げているフェルハト・パシャが従来の第四宰相から第三宰相に昇格したとするのが正しい。ムスタファ・パシャとアフメット・パシャの順序についても既に述べたとおりである。そして、ムスタファ・パシャの一時的罷免についても先に述べたが、スレヤーは、さらに本篇のクズル・アフメットル・ムスタファ・パシャの項目の中で、九七年に引退した後、メッカ巡礼に赴き、その後没したと書いており、明かにムスタファ・パシャについて誤った記述をしている。

そして、回曆九七四年の状況についても、スレヤーは、まず同年に入り、ララ・ヒュセイン・パシャが宰相職を免ぜられたとし、この人物について一貫して誤り続けている。さらに、このヒュセイン・パシャにかわりピヤール・パシャ Piyale Paşa が宰相となったと記している。確かに大提督であったピヤール・パシャはこの回曆九七四年中に、サクズ Sakız (キオス島) 征服の功をもって宰相に任ぜられているが、それは実際には、スレイマン大帝がこの年没し、セリム二世がその跡を継いだ後のことであり、本稿の範囲外の出来事に属している。

以上で回曆九六〇年から九七四年までのスレヤーの宰相表の検討をおえることとしよう。

(六) ラマザン・ザーデ、アターイー、ペチエヴィーの

宰相表・宰相列伝の再検討

これまで、既に公刊せられている史書・年代記類を主要史料として、スレイマン大帝時代の大宰相及び宰相職就任者の確定を試みてきた。その結果確認された大宰相職及び宰相職就任者はそれぞれ本節末の表一及び表二の左端の欄

の通りである。

ここで、すでに史料紹介の際に述べたように、諸史料の中には大宰相職及び宰相職就任者についての表あるいは列伝を含むものがある。それらのなかで、刊本となっていて、比較的重要と思われるものは、ラマザン・ザーデ及びアターイー<sup>(18)</sup>の宰相表及びペチエヴィーの宰相列伝である。これら三史料の内容と、本稿の考究の結果を、表一及び表二にまとめて対比し、あわせて、スレヤーの『シジッリ・オスマーニー』の宰相表・本文項目記事とも対比して、スレイマン大帝時代の宰相及び宰相職就任者に関する一覧表としてみた。

スレイマン大帝時代の宰相職就任者についての表一においては、さらに一八世紀に執筆された大宰相列伝『ハッディカート・ウル・ヴェゼラー』との比較対照も行ったが、その結果、大宰相職就任者については、本稿の考究の結果と各種史料中の大宰相表・列伝に含まれている人物とが完全に一致した。

これに対し、大宰相に到達しえなかつた宰相たちについては、諸史料間で若干の異同が見られる。この点について、以下、少しく検討を加えてみたい。

まずラマザン・ザーデについてみると、異同は二箇所ある。第一点は、セミズ・アフメット・パシヤが欠けていることである。この点についてみれば、すでに史料紹介において述べたように『ラマザン・ザーデ史』のオスマン朝史の部分は、回曆九六九年ムハッレム月までで一応終っており、その宰相表の最後の部分をなす現任宰相一覧もまた、第五宰相クズル・アフメットル・ムスタファ・パシヤまでで終っている。<sup>(19)</sup>ムスタファ・パシヤが宰相に任ぜられたのは、既に見たように回曆九六九年ムハッレム月二四日のことであったために、『ラマザン・ザーデ史』に採り入れられたのである。それに対し、スレイマン大帝の治世において最後に任命された宰相であったセミズ・アフメット・

パシヤの場合、その任命の日附はこれも前項で考証したように回曆九七〇年ジルカッデ月一三日のことであつたと考えられるから、この人物は『ラマザン・ザード史』の記述の範囲外におかれたのであろう。

第二点は、スレイマン・パシヤなる人物が見られる点である。この部分、ラマザン・ザードはその前後も含めた部分で次のように記している。

「大宰相アヤス・パシヤは宰相であつたとき、イブラヒム・パシヤに代つて大宰相となつた(回曆九四二年)。ギユゼルジェ・カスム・パシヤは職を免ぜられた。スレイマン・パシヤとユラク・ムスタファ・パシヤ Yulak Mustafa Pasaに宰相の地位(ヴェザールレット *Vezairet*)が与えられ、ブデインの守護にすえられた。大宰相ルトフィー・パシヤは、アヤス・パシヤの代りに宰相となつて(回曆九四四年)……」<sup>(82)</sup>

ここで最も問題なのは「スレイマン・パシヤとユラク・ムスタファ・パシヤに宰相の地位が与えられブデインの守護にすえられた。」との部分である。ここで、すでに言及したようにラマザン・ザードにある「ヤヌラク(ユラク)・ムスタファ・パシヤ」は、実は、プラク・ムスタファ・パシヤと同一人物である。とすれば、このムスタファ・パシヤは、本稿の考証で大宰相イブラヒム・パシヤ処刑後に宰相に任ぜられたことがすでに確認されたプラク・ムスタファ・パシヤであり、宰相任命の時期もちょうど一致する。

そこで問題となるのがスレイマン・パシヤである。一つの可能性としては、前述したルトフィー・パシヤが回曆九四三年の条でハードウム・スレイマン・パシヤを宰相としたとの記述に従い、これをハードウム・スレイマン・パシヤと解することである。しかし、そうだとすると問題となるのは「ブデイン(ブダペスト)の守護にすえた」との文言である。ここで、この文中のプラク・ムスタファ・パシヤは帝国中央の宰相に任ぜられたことに疑いはない。それ



ゆえ、ブデインの守護にすえられたのは、スレイマン・パシャとみる方が自然であろう。ところが、ルトフィー・パシャには前述の記事にひき続き、「それから宰相の名をもってムスル（エジプト）に送り<sup>(164)</sup>」とあつてうまく合致しない。しかも、ラマザン・ザーデは、問題の部分の數行後に、ハードウム・スレイマン・パシャの大宰相就任に言及している<sup>(165)</sup>。

そこで「ブデイン云々」という文言との関連からいま一つ考えられるのは、時期的には回曆九四八年とかなり開きがあるが、この年に宰相位を与えられて新たに創設されたブデイン・ベイレルベイリイに初代ブデイン・ベイレルベイリイとして任命された元バーダッド・ベイレルベイリイ、スレイマン・パシャ<sup>(166)</sup>のことである。ラマザン・ザーデの挙げているスレイマン・パシャを、このウズン [Uzun] の呼び名をもって知られるスレイマン・パシャと解すれば、年代の上では齟齬を生ずるが、「ブデインの守護にすえられた」という後段とは、一致するかと思われる。

ここで、アターイーもまた、ハードウム・スレイマン・パシャとは別人と考えられるもう一人のスレイマン・パシャについて記している。そしてアターイーも、このスレイマン・パシャの項を、ギユゼルジェ・カスム・パシャの項にすぐひきつづいて並べたうえで、

「(スレイマン・パシャ) 宰相位(ヴェザーレット)をもつてブデインに赴いた<sup>(168)</sup>。」と述べている。このスレイマン・パシャは、疑いなく、先の初代ブデイン・ベイレルベイリイ、ウズン・スレイマン・パシャである。そして、この人物が本稿の考究の結果にもれているのは、いうまでもなく、このスレイマン・パシャが帝国中央の宰相ではなく、宰相位をもつて地方に赴く「ハリチュ・ヴェジリー(外の宰相)」であつたからに他ならない。

アターイーの宰相表では、いま一つの相違点はピヤール・パシャが挙げられていることである。しかし、ピヤール・

パシヤについては、すでにスレーヤーの宰相表を検討する際に、この人物がセリム二世時代に入って、初めて宰相となったことを明かとした。第三の相違点である、プラク・ムスタファ・パシヤが見えない点については、比較的事績にも乏しく史書にも現われることの少ないこの人物を、アターイーが宰相表作製にあたって、単に見落したものである。

ペチェヴィーの宰相列伝についても、ペチェヴィーがペルテウ・パシヤをスレイマン大帝時代の宰相列伝においても、また次のセリム二世時代の宰相列伝の中でも採り上げていないのは、年代記の本文中でスレイマン大帝時代の記事の中で宰相として記述<sup>(註)</sup>しているところから見ると、単なる見落しによるものと思われる。

そこで最後に残るのが、ペチェヴィーが、スレイマン大帝時代の宰相の列伝の中に採り上げているヤフヤール・メフメット・パシヤ Yahyali Mehmed Paşa の問題である。ペチェヴィー自身が、このヤフヤール・メフメット・パシヤについて

「スルタン・バズイット・ハン (バズイット二世) の時代に大宰相からボスナ・サンジャウを隠居料として与えられて (引退した) ヤフヤー・パシヤの高貴な子息である。」<sup>(註)</sup>

と述べているところから、この人物は、ヤフヤー・パシヤ・ザーデ Yahya Paşazade の呼び名によってもよく知られているメフメット・パシヤであることは明かである。このヤフヤー・パシヤ・ザーデ・メフメット・パシヤは、その兄弟たちとともに、主としてバルカンからハンガリーにかけてのルメリの辺境で異教徒との聖戦に活躍した武将であった。メフメット・パシヤは、セメンドレ<sup>(註)</sup>、モレ<sup>(註)</sup>等のサンジャク・ベイを歴任したのち、創設後まもないブディン・ベイレルベイスイ職に任ぜられ、回曆九五〇年から九五四年頃までこの職に在任<sup>(註)</sup>したのち没した人物である。

この人物の経歴については、ルトフィー・パシヤ及びルステム・パシヤ史が、回曆九四八年に、ブディン・ベイレルベイリイ創設と時を同じくして、アナドル・ベイレルベイスイに任ぜられたと述べているが、ルトフィー・パシヤも含め、管見の及ぶところいずれの史料にも帝国中央の宰相に列したという記事は見えない。ペチエヴィー自身も、彼の宰相列伝に採り上げたにもかかわらずヤフヤール・メフメット・パシヤについては、専ら西方の辺境における異教徒に対する征服活動について語っており、帝国中央の宰相に列したとは一言も述べていない。このような諸点からみて、ヤフヤール・メフメット・パシヤが帝国中央のクツヴェ・ヴェジリー、すなわち「内の宰相」に就任したことがあつたとは考え難い。

もし、ペチエヴィーがヤフヤール・メフメット・パシヤを、宰相列伝中に採り上げたことが単なる誤りによるのではないとすれば、ペチエヴィーが、メフメット・パシヤをこのように取り扱った根拠は、帝国中央の宰相に就任したとでなく、むしろ、ブディン・ベイレルベイスイ職に就任したことに関係づけられていたのではなからうか。

すでに見たように、ブディンの場合、ベイレルベイリイの創設当初のベイレルベイたるウズン・スレイマン・パシヤにも、初めから宰相位が与えられた。そして、その後も、しばしば有力なブディン・ベイレルベイスイには宰相位が与えられ、これが慣行化していったと言われる。今回使用した諸史料の中には、ヤフヤール・メフメット・パシヤが、宰相位を与えられたブディン・ベイレルベイスイであつたことを確認する記事を見出し得ていない。しかし、ペチエヴィーのヤフヤール・メフメット・パシヤに関する扱いが、もし単なるペチエヴィーの錯誤に帰せられるのではないとすれば、ペチエヴィーのこの取り扱いの根拠は、ヤフヤール・メフメット・パシヤが宰相位を有するベイレルベイ、すなわちハリチュ・ヴェジリーの中の有力な一人であつたことに求められるのではなからうか。

(七) むすび

以上、スレイマン大帝時代のオスマン朝の大宰相職就任者の確定作業を終え、次の第四節において、まず大宰相及び宰相職就任者の各々に関して、可能な限りその経歴の確定に努力し、ついで第五節において、スレイマン大帝時代における大宰相及び宰相職就任者の経歴の諸類型とその特質の解明を試みることにしたい。

- 1 Celalzade, 23-b.
- 2 Celalzade, 22-b.
- 3 SO, IV, 742.
- 4 SO, IV, 15-16.
- 5 Celalzade, 130-a-131-a.
- 6 Lâ'îfî, 314.

なお、このフェルハト・パシヤについては、ペチエヴィーの宰相略伝 (Peçevi, I, 28.) 及び年代記の部分 (Peçevi, I, 82.) にも同様の記述が見られ、ジェラルル・ザードとルトフィー・パシヤの記述が再確認される。

7 スレイマンは、通例は、スレイマン二世と呼ばれる。しかし時に、オスマン朝第四代バヤズィット Beyazid 一世がアンカラの戦いでティムールに敗れ、その後一〇数年間分裂状態となった際に、ルメリ Rumlî (バルカン方面) で勢力をふるったバヤズィットの王子の一人、エミール・スレイマン Emir Süleyman をスルタンと認めてこれをスレイマン一世とし、スレイマン大帝をスレイマン二世と呼ぶことがある。この数え方からすると、スレイマン大帝はオスマン朝第一二代のスルタンということになる。

- 8 Ramazanade, 240.
- 但し、マターイーは、その宰相表の中で、任命の時期を回曆九二七年としている。(Ata<sup>1</sup>, I, 103.)
- 9 Pecevi, I, 28.
- 10 Rüstem, 61.
- 11 Celâlzade, 65-a.
- 12 イェレビヤ・パシヤ宮殿の造営が回曆九二七年に完成したことは、古文書によっても確認されている (Nurhan Atasoy, Ibrahim Paşa Sarayı, İstanbul, 1972, 14-15.)°
- 13 Cengiz Orhonlu, "Kâsım Paşa", EI<sup>2</sup>, IV, 722.
- 14 SO, IV, 742.
- 15 SO, IV, 47.
- 16 Sehi, 24-b, 25-a., Latif, 219., Asık Çelebi, 214-a.  
Kınalzade, I, 546.
- 17 Sehi, 24-b., Latif, 219.
- 18 イェズニット二世時代の主要人物たちについてのライントルの精緻な研究においても、このことは同様である。  
Hedda Reindl, Männer um Bâyezid, Berlin, 1983., 234-235.
- 19 Rüstem, 61.
- 20 Celâlzade, 85-a.
- 21 SO, IV, 742.
- 22 Celâlzade, 97-b.

スレイマン大帝時代オスマン朝の大宰相と宰相たち (一)

- 23 ハンメル及び現代トルコのオスマン史の碩学ウズンチャルシユルは、この見方をとるが、(GOR, III, 25, OT, II, 314.) 同時代人であったジェラルル・ザードはこの点につき何も言及していない。後代の諸史料はやや混乱している。
- 24 Celâlzade, 111-a.
- 25 Celâlzade, 111-a.
- 26 イブラヒム・パシヤが内廷出身で、政務に通じていないため、実務に通じた補佐役として起用されたのが、本稿の基本史料の一つ『タンカート・ウル・メマールイク』の著者ジェラルル・ザード・ムスタファであった。İsmail Hakkı Uzunçarşılı, "Onaltıncı Asır Ortalarında yaşamış İki Büyük Şahsiyet Tosyalı Celâlzâde Mustafa ve Salih Çelebiler", Belleten, Vol. XXII, No. 87., 394.
- 27 Celâlzade, 111-a.
- 28 Lâîfî, 314.
- その後のフェルハント・パシヤの運命については既に述べた。
- 29 Celâlzade, 110-a.-b.
- 30 Celâlzade, 112-a.
- 31 Celâlzade, 109-a.
- 32 Celâlzade, 109-a., GOR, III, 35.
- ルトフイー・パシヤが、アフメット・パシヤを、ムスタファ・パシヤの後任としているのは誤りである (Lâîfî, 314.)°
- 33 Celâlzade, 112-a.
- この後、アフメット・パシヤは、旧マムルーク勢力を頼り、独立政権樹立をめざして反乱を企てたが失敗し、九三〇年に処刑された。(Celâlzade, 115-a.)

「ハイイン Hain (反逆者)」の呼び名は、この事件の後に、つけられたものである。

34 Celalzade, 109-b.

35 Feridun, I, 523.

36 スレーヤーは、本篇のアヤス・パシヤの項目では、アヤス・パシヤが回曆九二九年に第三宰相になったとし (SO, I, 447.)

宰相表では、アフメット・パシヤの反乱の後にムスル・ベイレルベイスイに任せられた宰相ギョゼルジエ・カスム・パシヤの後任として、宰相となったとし (SO, IV, 742.) ギョゼルジエ・カスム・パシヤの項目ではその年を回曆九三〇年としている (SO, IV, 47.)。しかし、スレーヤーのこれらの記事は自らの記事自体の中で矛盾しており、そのうえ、当時既にギョゼルジエ・カスム・パシヤが宰相であったことを示す史料もないから、この点も誤りと思われる。

37 Celalzade, 116-b.

38 Celalzade, 137-b.

39 なお、ベチエヴィーは、ムスタファ・パシヤが回曆九二九九年にエジプトから第二宰相として帰国したと記し (Pegevl, I, 79.)、回曆九三二二年の項でも同じく第二宰相として記する (Pegevl, I, 85.)

40 Celalzade, 184-a., Pegevl, I, 132.

41 このときに昇格したのか否かについて史料には明記されていないが、アヤス・パシヤは、回曆九三六年 (Pegevl, I, 153.) 以降、回曆九三八年 (Celalzade, 212-a.) を経て九四二年に至るまで、殆どつねに第二宰相として現われる。

42 SO, IV, 47.

なお、この項目の中で、回曆九三五年にスレーヤーが「ブディン・ヴァリスィ Budin Valisi」すなわち、ブディン・ベイレルベイスイから転じて宰相となったと述べているのは、ブディン・ベイレルベイリスィ Budin Beylerbeyliği の成立が回曆九四八年のことであるから (Celalzade, 345-b-346-a.)、少なくともブディン・ベイレルベイスイ職就任に関しては明かに誤りである。

スレイマン大帝時代オスマン朝の大宰相と宰相たち (一)

おそらくスレーヤーは史料整理の過程で、九五五年に同職に任ぜられた別人、ガーズイー・カスム・パシヤ Gazi Kasım Paşa の経歴とを混同したのであらう。スレーヤーのガーズイー・カスム・パシヤについての項目にも誤りが見られる。(SO, IV, 48.)

- 43 Celâlzade, 278-b., Lâtfî, 355.
- 44 Celâlzade, 278-b., Lâtfî, 355.
- 45 GOR, III, 199.
- 46 GOR, III, 199.
- 47 GOR, III, 200.
- 48 Hîseyin Gazi Yurdaydın, "Bostan'ın Süleymanâmnesi (Ferdiye atfedilen Eser)," Belleten, Vol. XIX, No. 74, 137-202. (次に Bostan と略記して同綴のみを記す。)
- 49 Bostan, 163.
- 50 "1527'de Osmanlı İdarî Düzeni, Osmanlı Ümerası, Ümera Hasları (Topkapı Sarayı Arşivi, Defter 5246 sayılı Deftere göre)," Metin Kunt, Saucaktan Eyalete, İstanbul, 1978, Appendix 1., 125.
- 51 Peçevi, I, 30-31.
- 52 Ramazanade, 240.



なぞ、ムスタファ・パシヤについて、「ブラク」の他に様々の呼称が与えられていることが知られている。(Kronoloji, II, 77)これは「P」音を表わす「ル」シヤ語系の字母「ペー」と「Y」音を表わすアラビア語の字母「イェー」及び、「B」音を表わす同じくアラビア語の字母「ベー」の形が、少なくとも写本の中ではしばしばわめてまぎらわしいことからきているのであろう。

53 Lâtfi, 358.

54 GOR, III, 199., Bostan, 164.

ルトフイー・パシヤがこの年に宰相に任ぜられていたことは、シュラール・ザーデからも確認し得る (Celâlzade, 285-b.)。

なぞ、このルトフイー・パシヤは、『ルトフイー・パシヤ史』の著者でもある。

55 Celâlzade, 297-a., GOR, III, 200.

56 Celâlzade, 297-b., GOR, III, 200.

57 Lâtfi, 370.

58 Lâtfi, 374.

59 Rüstem, 103.

60 Rüstem, 103.

61 Rüstem, 104.

62 スレイマン大帝時代史の専門家であるアンカラ大学のシエラフエッティン・トゥラン教授も、トルコ語版イスラム事典の「ハードゥム・スレイマン・パシヤ」の項目論文の中で、典拠は示さぬまま、その宰相任命の時期を回曆九四六年レジェフ月  
ムハッラマ。

Serafetin Turan, "Süleyman Paşa(Hadım)," IA, XI, 196.

63 İsmail Hakki Uzunçarşılı, İbrahim Kemal Baybura, Ülkü Alınoğlu, eds., Topkapı Sarayı Müzesi Osmanlı Sarayı

スレイマン大帝時代オスマン朝の大宰相と宰相たち(一)

Arşivi Kataloğu, Fernânlar, Fasc. I, Ankara, 1985, 8.

64 Peçevi, I, 224.

65 A. J. Wensinck [J. Jomier], "Hadidj", *Et*, III, 33.

66 Peçevi, I, 224.

67 Wensinck [Jomier], "Hadidj", *Et*, III, 34.

68 回曆九六六年に、ムスル・ベイレルバイスに任ぜられたイスケンデル・パシヤの場合、前任地テメシユヴァルからジェマール・エル・アフル月一八日（西曆一五五九年三月二八日）にイスタンブールに到着し、スルトンに謁見したのち、旅を続けて同年レジェブ月下旬（西曆四月三〇日から五月五日の間）にアレクサンドリアに到着している。これからみて、大官が供揃えをそろえて旅行しても一ヶ月と一週間以内の行程を要するにとどまったことがわかる。（Rüstern, 192）

69 ハードゥム・スレイマン・パシヤのイスタンブール帰還の具体的日附については、ジェラール・ザードヤルトフィー・パシヤのような同時代の著者たちも、トゥランや、メルチッヒのようなスレイマン・パシヤについてのモノグラフのある現代の歴史家たちも与れつゝならず（Turan, "Süleyman Paşa (Hadım)", *IA*, XI, 196., Herbert Melzig: *Büyük Türk Büyük Hindistan Kapılarında*, İstanbul, 1943, 53.）

70 Celalzade, 338-b., *GOR*, III, 212-213.

71 "Tarih Kayıtları", 73.

そして、このことが、後にルステム・パシヤが大きな政治的影響力を獲得するうえで、極めて重要な意味をもった。

72 Latfi, 3., 386.

なお、ルトフィー・パシヤの大宰相罷免の年については、ルトフィー・パシヤ自身が回曆九四八年としているにもかかわらず、古来、多くの著作家が回曆九四七年としてきた。キョプリユリュによれば、スレヤーも含めた後代の著作者たちは、この点に

つらて一七世紀中葉の人、キヤーティン・チエレビイの『タクヴィム・ウツ・テヴアーリン Takvim üt-Tevarih』の誤りを踏襲して九四七年説をとったのだと指摘している。(Köprülüzade Mehmed Fuad (Mehmed Fuad Köprülü), "Lütfi Paşa", *Türkiyat Mecmuası*, Vol. I, 128.)

キョプリュリユによれば、ベチエヴィーのみはこの点で、年号は直接明示しないものの、事態を正しく記述しているというが、実は、ベチエヴィーも、大宰相列伝の中のノードゥム・スレイマン・パシヤの項で、ルトフィー・パシヤの後任であるはずのスレイマン・パシヤ自身が回曆九四七年に大宰相の職を免ぜられたと述べ誤りを犯している。(Pesevi, I, 21.)

73 GOR, III, 227.

74 GOR, III, 227.

75 GOR, III, 227.

76 回曆九四九年附のヂィヤルズクル Diyarbekir の検地帳の余白の『タバカート』の著者ジェラルル・ザードの自筆の書込みでは、ルステム・パシヤ、メフメット・パシヤ、ヒュスレウ・パシヤの順で、大宰相以外の三名の宰相の名前がみられる。

(Uzunçarşılı, Merkez Teşkilâtı, 188.)。回曆九五〇年についてはジェラルル・ザードの『タバカート』のジェマーシ・エル・エツヴェル月二二日の条に、第三宰相メフメット・パシヤ、第四宰相ヒュスレウ・パシヤとある (Celâlzade, 366-a.)。さらに同年末のジルヒッジエ月下旬附の一文書にも、宰相を列記して、スレイマン・パシヤ、ルステム・パシヤ、メフメット・パシヤ、ヒュスレウ・パシヤの四人を挙げていゝ。Tayyib Gökbilgin, XV-XVI. Asırlarda Edirne ve Paşa Livası, İstanbul, 1952, 503. (以下 Gökbilgin, Paşa Livası 各頁)

77 Tayyib Gökbilgin, "Süleyman I", İA, XI, 130.

なお、大宰相ノードゥム・スレイマン・パシヤの罷免の時期については、ルトフィー・パシヤは回曆九五二年としている (Lütfi, 433.)。『ルステム・パシヤ史』はこの日附を回曆九五一年ラマザン月一三日としており (Rüstem, 137.)。ハンメルも

スレイマン大帝時代オスマン朝の大宰相と宰相たち (一)

(GOR, III, 268.) ヴェズンチャルシムン (OT, III, 549.) トラン (Turan, "Süleyman Paşa(Hadım)", IA, XI, 197.) タン  
トマン (Fevzi Kurtoglu, "Hadim Süleyman Paşa'nın Mektupları ve Belgradın Muhasara Piani", Belleken, Vol. IV,  
No. 13, 59.) の近代トルコの歴史家たちもこれに従っている。しかし、ギョクビルギン教授は「古文書群に依拠してこの日  
附を確定したので、ここではこれに従う。

なお、この事件に関して、ハチヴイーは、宰相列伝の「イヴァーネ・ヒュスレウ・パシヤ Divane Hüsvrev Paşa (プリ・ヒ  
ュスレウ・パシヤのこと)」の項で、事件当時ヒュスレウ・パシヤが第二宰相、ルステム・パシヤが第三宰相で、下位のルステ  
ム・パシヤが上位の二人を一気に排除して自ら大宰相となるべく陰謀を企て、両者を争わせて目的を達したと述べており  
(Pecevi, I, 29.) 後代の歴史家にもこれに従う者が見られるが、この当時、ルステム・パシヤの方がヒュスレウ・パシヤよ  
り上位であったことはすでに述べた如くであり、このハチヴイーの記事は事実を正しく反映しているとはいえないものと思  
われ。

78 Rüstem, 137-138.

79 Pecevi, I, 24.

80 Pecevi, I, 30.

81 回曆九五二年シルヒッジエ月中旬 (GOR, III, 270.) 九五四年シルカッテ月上旬 (Gökbiğim, Paşa Livaşı, 507.) 等の日附  
の時期に第二宰相として現われている。

82 ギョクビルギン教授の引用する回曆九五四年シルカッテ月上旬附の検地帳へのジェラール・ザーデの書き込みによる。  
(Gökbiğim, Paşa Livaşı, 507.) なお、この文書の日附は、ギョクビルギン教授の著書の本文五〇七頁では、「九四、五年」とな  
っているが、卷末正誤表において「九五、四年」に訂正されている。(Gökbiğim, Paşa Livaşı, 631.)

83 Rüstem, 152.

84 Tayyib Gökbilgin, "Rüstem Paşa ve hakkındaki ithamlar", *Tarih Dergisi*, Vol. VIII, No. 11-12, 13.

85 Gökbilgin, Paşa Lıvası, 501.

86 Celâlzade, 396-a.

なお、本文には確かに「第二宰相 (ヴェジリー・サーニー *Vezir-i Sani*)」とあるにもかかわらず、『タバカート』の編者カッハルト博士の作製した詳細目次では「第三宰相 3. *Wezir*」とあり、誤植と思われる (*Petra Kappert*, "Einführung", *Celâlzade*, 90.)。より後代のペチエヴィーでは、この件に言及した個所で「第三宰相 (ヴェジリー・サーリス *Vezir-i Salis*)」  
フ・メフメット・パシヤ」(*Pecevi*, I, 282.)とあるが、今、より後代のペチエヴィーを正しいと断ずる根拠を欠くのでシ  
ラール・ザードの本文に従っておく。

87 Celâlzade, 396-a., *Pecevi*, I, 272.

88 Celâlzade, 399-a., *Pecevi*, I, 272.

89 Celâlzade, 399-a-b.

90 Rüstem, 179.

91 SO, IV, 742.

92 なお、スレーヤーは本篇のギュゼルジェ・カスム・パシヤの項目では、回曆九三七年に引退したと述ぶ (SO, IV, 47.)。宰相表の記事とも一致していない。

93 Gökbilgin, Paşa Lıvası, 505-506. ギョクビルギンは、本文ではイブラヒム・パシアをダール・ウツ・サーデ・アースイデアったとしているが、すぐ下に引用された史料にはアー・イ・バーブ・ウツ・サーデとある。

94 なお、スレーヤーは本篇のヒュスレウ・パシヤの項目では、回曆九四三年に宰相となったとする。(SO, II, 272.)

95 本篇のブラク・ムスタファ・パシヤの項目では、時期を示さず宰相位を与えられたとし、回曆九三八年にシヤム・ベイレル

スレイマン大帝時代オスマン朝の大宰相と宰相たち (一)

ニイヌイ Sam Beylerbeyisi (シリアのベイレルベイ) に任ぜられたのち、引退し、九四〇年に没したとしている (SO, IV, 372)。プラク・ムスタファ・パシヤの経歴については、本稿第四節で詳しく検討するが、実際には、シャム・ベイレルベイ スイとなった後に、宰相に任ぜられている。

96 SO, III, 78.

97 SO, IV, 113.

98 キョクベルギン教授の引用する同日附文書による (Gökbilgin, Paşa Livası, 501.)

99 OT, II, 402-403.

100 Celalzade, 436-b.

101 Celalzade, 436-b.

その際、ジェラルル・ザーデは、ハイダル・パシヤを、「第三宰相」とし、ハンメルも典拠は示さぬまま同じく「第三宰相」としている (GOR, III, 316)。しかし、同年サーフェル月には、ハイダル・パシヤは第四順位に挙げられており、その当時ハイダル・パシヤより上位にあったアリ・パシヤ、イブラヒム・パシヤがなお宰相であったことを考えると、ジェラルル・ザーデとハンメルの記述には疑問が残る。ルトフィー・パシヤ及びいわゆる『ルステム・パシヤ史』は、いずれもこの事件について述べるに際し、ハイダル・パシヤが単に「宰相」職から罷免されたと述べるにとどまる。(Lutfi, 453, Rüstern, 186.)

102 Celalzade, 436-b-437-a.

103 Rüstern, 186.

104 Lutfi, 452.

105 Celalzade, 467-a.

106 Celalzade, 446-b.; 但し、ジェラルル・ザーデは、任命の年月日については述べていない。この点については、ルトフィー・

パシヤ、『ルステム・パシヤ史』。ペチエヴィーらもふれず、後代の史家、カラチエレビイ・ザーデが回曆九六一年ムハッレム月にムスル・ベイレルベイスイ職をはなれたと記している。(Ravza, 433) 近代のハンメル及びザムパウルのエジプト総督表にも、この日附が採用されているのでこれに従っておく(GOR, III, 795.)

107 Lâfti, 453, Rüstern, 186.

108 Celâzade, 447-a.

ペチエヴィーはこれを回曆九六一年ジュマージィ・エル・アフル月六日のこととしてゐる(Recevi, I, 307)が、誤記と思われる。

109 Rüstern, 186.

スレイマン大帝の遠征中、西曆一五五五年一月二〇日(回曆九六二年サーフェル月二六日)にイスタンブールに到着したオーストリアのハプスブルク家のフェルディナンドからの大使、フェズベクも、首都に、(コンスタンティノープルの)総督、宦官イブラヒム・パシヤが残っていたことを報告してゐる。(Augerii Gislennii Buspequii, "Legationis Turcicae Ex Epistolae quatuor, I.", in *Omnia quae extant*, 1740, Basel, Rep. ed., Graz, 1968., 40.)

110 『ルステム・パシヤ史』には、スレイマン大帝帰京後のイブラヒム・パシヤについて再び「第二宰相」とあり、完全に降格ないし除外され続けた訳ではないことは明かである。(Rüstern, 188.)

111 Celâzade, 451-b.

112 Celâzade, 474-a.

113 Ahmed Refik(Altınay), Sokulu, Istanbul, 1924., 16., Tayyib Gökbiğın, "Mehmed Paşa, Sokulu, Tavil", IA, VII, 597.)

114 "Tarih Kayıtları", 79.

スレイマン大帝時代オスマン朝の大宰相と宰相たち(一)

- 115 Celâlzade, 474-a, "Tarih Kayıtları", 79, Pecevi, I, 328.
- 116 Celâlzade, 498-a.
- 117 Celâlzade, 494-b.
- 118 Rüstem, 188, "Tarih Kayıtları", 79.
- 119 Celâlzade, 501-b-502-a.
- この日附について、パチエウイーはジエラルル・ザードと同じくシルカッテ月一三日とする (Pecevi, I, 343)。ムネツジム・ムシヒはシルカッテ月三日とする (Müneccimbaşı-A, III, 22; Müneccimbaşı-B, II, 571.) がこれは誤りであらう。ギョクブルギン教授は、これを回曆九六二年シルカッテ月一七日とするが、同時に西曆では一五五五年九月二八日にあたるとしており、これをもとに計算すると回曆の日附の方が誤植ないし誤記で、実際にはシルカッテ月一三日にあたることとなる。(Gökbilgin, "Süleyman I", IA, XI, 138.) ムンメルも、典拠を示さずに西曆では一五五五年九月二八日、回曆では九六二年シルカッテ月一二日としている (GOR, III, 339) が、換算の誤りかとも思われる。ここでは、最も同時代性の強いジエラルル・ザードに従う。
- 120 Celâlzade, 500-a., 502-a.
- 121 OT, 406.
- 122 Rüstem, 188, "Tarih Kayıtları", 79.
- 時期については、『ルステム・パシヤ史』では、単にスルタンの帰京後としており回曆九六二年末のこととしているのがわかるにとどまる。『年号日附記録集』では、大宰相アフメット・パシヤの処刑、ルステム・パシヤの再任の記事と同一項目の中で、回曆九六二年シルカッテ月一四日のこととして扱っている。「一四日」という日附自体問題があり、真に、イブラヒム・パシヤの引退が、大宰相更迭と結びついて行われたのかを確認することは困難である。しかし、両記事からみて、少なくとも



回曆九六二年末中にイブラヒム・ンシヤが引退したことは確かと考えられる。

123 Celâzade, 474-a., Lâîfî, 530.

124 "Tarih Kayıtları", 79.

125 "Tarih Kayıtları", 79.

126 Rûstem, 188.

127 回曆九六五年についてはウズメンチャルシユル教授の引くクトゥブ・メッキイー Kurb-ı Mekki の旅行記 (Merkez Teşkilâtı, 189.) 回曆九六八年については、『スレイマン大帝日誌 (スレイマン・ルズナーメシ Süleyman Rûznamesi)』に依拠するンメル (GOR, III, 379.) 及びシチュエヴィー (Peçevi, I, 385.) 等。

128 Rûstem, 190.

129 この点『ルズナム・ンシヤ史』の独訳は、スレイマン大帝の王子たちのうちすでに故人となっていたメフメットの遺された妻をめぐりだて争うてゐるが、シチュエヴィーは、王子メフメットの娘とし (Peçevi, I, 31.) 後代の史家、伝記作者たちもほぼこれを従ひてゐる。(Hâfiz Hüseyin Ayyansarayî, Vefevât-ı Selâtin ve Meşâhîr-ı Ricâl, İstanbul, 1978, 25, Mustakimzâde Süleyman Sadeddin, Tuhfet ü-Hattâtin, İstanbul, 1928, 355, OS, IV, 16, 等)。その人物を、スルキヤーは、ゴホーシヤール Hümaşah である。ホメテン家の詳細な系図を作製したマルダーン・ンセルに依つてゐる。(A. D. Alderson, The Structure of the Ottoman Dynasty, Oxford, 1956, Table XXX, "Süleyman I and his Family".)

130 『年号日附記録集』回曆九六五年レビ・ウル・ヒツウセル月二〇日の条には、「アー・イ・イ・ヒニチホリヤン Ağâ-i Yeniceriyân' ンセルント・ヤーが (クルセキ・ン) となつた」とある ("Tarih Kayıtları", 81.) この部分は、原本コピーからの判断困難である。"Tarih Kayıtları", Appendix, VII.) 今なべんが、この時期のトルコク・サンシヤク・シイヌイ Hersek Sancakbeyisi も確認せよ。 (Toma Popović, "Spisak Hercegovackih Namesnika u XVI Veku", Prilozi za

スレイマン大帝時代オスマン朝の大宰相と宰相たち (一)

Orientalnu Filologiju, Vol. XVI-XVII, 97.)

しかし、パンチエヴィーは、フェルハトが、イエニチエリ・アースイ職からカスタモヌ・サンジャウを与えられたと述べ (Pecevi, I, 31.)、後代の伝記作者たちもこれに従っており、さらに、フェルハトが、カスタモヌと何らかの深い関係をもって、たゞとは、カスタモヌのフェルハト・パンシヤ・ジャーシー Ferhad Paşa Camii (フェルハト・パンシヤ・モスク) の存在 (建立回曆九六七年) 及びその入口上の銘文からも推察しうるから (Mehmed Behçet (Yazar), Kastamonu, Âsar-ı Kadime, İstanbul, 1341, 84-85.)、同じく第一版「ルヌナム・パンシヤ史」に従うべく。

131 “Tarih Kayıtları”, 81.

132 Rûstem, 201.

133 Rûstem, 201.

134 “Tarih Kayıtları”, 83.

135 GOR, III, 370, Münecimbâş-B, II, 582, Solakzade, 553, Nuhbet, III, 97.

136 Selaniki, 7., Pecevi, I, 410.

及び、トウランの引く回曆九七二年シャムン月三〇日附の宰相ムスタフ・パンシヤに対する総司令官任命の勅令も参照。  
(Serafetin Turan, “Rodosun Zapından Malta Muhasarasına”, in Kanuni Armâğanı, Ankara, 1970, 114-116.)。なほ、パンチエヴィーの刊本中で、マルタ遠征の年についてこれを「回曆九六九年」(Pecevi, I, 410.)としているのはおそらく誤記ないし誤植である。

137 “Tarih Kayıtları”, 86.

138 この人物については Pecevi, I, 440-441.

139 その日附としては、ハンメルは西曆一五六五年六月二八日とし (GOR, III, 432.)、キョクビルギン教授は、西曆一五六五年

六月二十日 (Tayyib Gökbulgin, "Mehmed Paşa, Sokulu", *IA*, VII, 598.) と同じであり、必ずしも一定しないが、回曆九七二年シルカツキ月末のことがあったことは疑いなく。

140 Münceimbasi-A, III, 515, Münceimbasi-B, II, 586.

141 Selaniki, 19, Pecevi, I, 413, 417, GOR, III, 448.

142 Pecevi, I, 412.

143 Serafetin Turan, "Rodosun Zaptından Malta Muhararasına", in *Kanuni Armağanı*, Ankara, 1970, 105.

144 Turan, "Rodosun Zaptından Malta Muhararasına", 106.

145 Selaniki, 18.

このことは、自らこの戦役に従軍したセラニキーに一応従うが、スレイマン大帝の最後の出陣の日附については、回曆九七三年シェヴアル月九日との説も有力で (OT, III, 410.) あり、この日附は必ずしも確定的ではない。この点については、次の文献を参照 (Danışmend, *Kolonoloji*, II, 340-341, GOR, III, 438, 750.)

146 Selaniki, 18-19.

147 この日附についても年代記類の記述には喰い違いがあり、現代の研究者の間にも諸説があるが、ここでは一応現代トルコの史家ウズンチャルシユルヒダニシユメンドに従う。この点について詳しくは OT, III, 413, *Kronoloji*, II, 352-353.

148 刊本となっている年代記中、同時代人の手になる『セラニキー史』には、スレイマン大帝が没し、セリム二世が即位してしばらく時を経た回曆九七四年ラマザン月五日の儀式に参加した宰相として、メフメット・パシヤ、ベルテウ・パシヤ、アフメット・パシヤ、ムスタファ・パシヤの四名がこの順で挙げられている。(Selaniki, 80-81.) この日、スレイマン大帝の最晩年の宰相五名のうち四名がまだ宰相として在位していることを確認し得る。

また、ハンメルはこれより数ヶ月後の西曆一五六七年六月二十七日 (回曆九七四年シルヒツジェ月にあたる) に、ハプスブルク

スレイマン大帝時代オスマン朝の大宰相と宰相たち (一)

家の皇帝からの使節に関する記事の中で、皇帝の使節が大宰相、第二宰相ベルテウ・パシヤ、第三宰相フェルハト・パシヤとしてその他の三人の宰相たちに恒例の贈り物を贈ったことを述べており、この時点で、スレイマン大帝最晩年の五人の宰相のうち残る一人、フェルハト・パシヤもお宰相として在任していたことが確認される。(GOR, III, 513.)

149 SO, IV, 742-743.

150 SO, IV, 742.

151 SO, I, 346.

なお、この項目の中では、スレイヤーは、イスケンデル・パシヤが回暦九六二年に宰相となったかのように記しており、宰相表の記事とも矛盾している。

152 Selaniki, 19.

なお、ペチェヴィーは、このイスケンデル・パシヤがイスタンブールの守護に残ったことを述べたうえで、単にボスタンジユ・メンシヒ Bostancıbaşı 職出身だったと述べるにとどまる。(Peçevi, I, 422.)

153 SO, I, 346.

154 SO, II, 184.

155 SO, IV, 375.

156 SO, IV, 375.

157 Selaniki, 78.

158 Ramazanade, 238-241.

159 Atâ'i, I, 103-105.

160 Peçevi, I, 20-31., 439-443.

161 但し宰相表に採り上げられた個々の人物についての記載は、例えば大宰相を勤めたルトフィー・パシヤや宰相を勤めたハイダル・パシヤの逝去についての記事のように実際には回曆九七一年におこった事項(“Tarih Kayıtları”, 88.)まで採り入れられつつある点には注意を要する。

162 Ramazanade, 240.

163 Lâfî, 358.

164 Lâfî, 358.

165 Ramazanade, 240.

166 Celalzade, 345-b.-346-a.

167 S. Takâtz, Macaristan Türk Aleminde Çizgiler, tr. by Sadrettin Karatay, Ankara, 1948., 331.

168 Atâî, I, 194.

169 たとえば、回曆九六六年の記事では第四宰相として (Pecevi, I, 385.) また九七三年の条では、第二宰相として (Pecevi I, 413.) 現わされてゐる。

170 Pecevi, I, 29.

171 Celalzade, 190-b., 203-a., Pecevi, I, 135., 156.

172 Celalzade, 240-b., Pecevi, I, 172.

173 ヤフヤール・メフメット・ハイが回曆九五一年にブディン・ベイレルベイスイに在任していたことは、ペチエヴィーによつても確認出来る。(Pecevi, I, 264.)

ハンガリーの史家タカツは、メフメット・パシヤの在任期間を西曆一五四三年五月より一五四八年一〇月までとし、その後任のガーズイー・カスム・パシヤの任命を西曆一五四八年二月としてゐる。(Takâtz, Macaristan Türk Aleminde Çizgiler,

スレイマン大帝時代オスマン朝の大宰相と宰相たち (一)

Ankara, 1948, 331.) メフメット・パシヤの任期の終りが一〇月で、カスム・パシヤの任期の始期が同じ年の二月となっているのは、あきらかに矛盾しているが、同じくハンガリーの史家フェケテが、カスム・パシヤの任期の始まりを西暦一五四八年二月としているから (L. Fekete, Einführung in die osmanisch-türkische Diplomatie der türkischen Botmäßigkeit in Ungarn, I, Budapest, 1926, 9.)、むしろ、メフメット・パシヤの任期の終りを二月以前と考えるべきであろう。とすれば、メフメット・パシヤのブディン・ベイレルベイスイとしての在任期間は、西暦一五四三年五月から、一五四八年二月以前となり、これは、回曆九五〇年から、回曆九五四年末―九五五年初にあたる。ここで『ルステム・パシヤ史』の回曆九五四年シルカッデ月一九日に、メフメット・パシヤがブディンから免ぜられ、後任にカスム・ベイが任ぜられたとある (Rüstem, 152.) から、ヤフヤール・メフメット・パシヤのブディン・ベイレルベイスイとしての在任期間は、ほぼ回曆九五〇年から九五四年末までであったと一応みておきたい。

174 Lütfi, 388, Rüstem, 112.

175 Peçevi, I, 29-30.

表 1 スレイマン大帝時代の大宰相職就任者 (就任順)

本論文で確認された大宰相	Ramazan-zade	Peçevi	Atâ'i	S O 宰相表	SO 本文	Hadikat ül-Vüzerâ
Piri Mehmed Paşa	○	○	○	○	○	○
İbrahim Paşa	○	○	○	○	○	○
Ayas Paşa	○	○	○	○	○	○
Lûtfi Paşa	○	○	○	○	○	○
Hadım Süleyman Paşa	○	○	○	○	○	○
Rüstem Paşa	○	○	○	○	○	○
Kara Ahmed Paşa	○	○	○	○	○	○
Semiz Ali Paşa	○	○	○	○	○	○
Sokollu Mehmed Paşa	○	○	○	○	○	○

表 2 スレイマン大帝時代の宰相職就任者 (大宰相職就任者を除く)  
(アルファベット順)

本論文で確認された宰相	Ramazan-zade	Peçevi	Atâ'i	S O 宰相表	SO 本文
Ahmed Paşa (Hain)	○	○	○	○	○
Ahmed Paşa (Semiz)	—	○	○	○	○
Ferhad Paşa	○	○	○	—	○
Ferhad Paşa (Hattat)	○	○	○	○	○
Haydar Paşa (Hadım)	○	○	○	○	○
Husrev Paşa (Deli)	○	○	○	○	○
İbrahim Paşa (Hadım)	○	○	○	○	○
Kasım Paşa (Güzelce)	○	○	○	○	○
Kasım Paşa (Koca)	○	○	○	○	○
Mehmed Paşa (Sofu)	○	○	○	○	○
Mustafu Paşa (Çoban)	○	○	○	○	○
Mustafa Paşa (Kızıl Ahmedlü)	○	○	○	○	○
Mustafa Paşa (Pulak)	○	○	—	—	○
Pertev Paşa	○	—	○	○	○
—	Süleyman Paşa	—	Süleyman Paşa	—	—
—	—	Mehmed Paşa (Yahyalü)	—	—	—
—	—	—	(?Piyale Paşa)	(?Piyale Paşa)	(?Piyale Paşa)
—	—	—	—	Hüseyin Paşa (Lala)	Hüseyin Paşa (Lala)
—	—	—	—	İskender Paşa	İskender Paşa

スレイマン大帝時代オスマン朝の大宰相と宰相たち (一)